

竹富町文化振興・観光交流拠点
基本構想書

令和3年3月

目次

第1章 竹富町文化振興・観光交流拠点整備の背景

1. これまでの経緯	3
2. 拠点整備の必要性	4
3. 構想の目的	6
4. 社会的背景	7

第2章 竹富町の概要

1. アクセス	11
2. 竹富町の社会・歴史的環境、文化遺産・文化資源	12
3. 竹富町の自然環境、世界自然遺産推薦候補地の概要	20
4. 竹富町周辺の施設、関連施設	22
5. 人口動向	24
6. 観光動向	28

第3章 基礎調査

1. 町民意向調査	29
2. 事例調査	30
3. 有識者意見調査	30
4. 町民意向調査および有識者意見調査まとめ	31

第4章 基本理念・方針

1. 本拠点整備の課題	35
2. 本拠点整備に期待されること	37
3. 基本理念	39
4. 本施設の利用者層	42
5. 基本方針	44
6. 施設整備の方向性	47

第5章 事業活動・施設機能

1. 事業活動の基本方針	49
2. 事業活動案及び、本施設が有すべき機能 (調査研究、収集保存、展示体験、教育普及、交流・観光等)	53

第6章 展示構想

- 1. 展示の基本方針 61
- 2. 展示コンセプト 61
- 3. 拠点施設における展示構成（コア展示） 62
- 4. 各島々でのサテライト展示のあり方 64
- 5. 展示計画時の留意点 65

第7章 管理運営構想

- 1. 管理運営の考え方 66
- 2. 管理運営体制構築に向けた必要条件の整理 67
- 3. 運営方式の考え方 69
- 4. 町民参加、連携の考え方 70
- 5. 開館形態 71

第8章 施設設備構想

- 1. 拠点施設およびサテライト施設の設置形態 74
- 2. 候補地の検討 74
- 3. 施設規模、必要諸室と面積 76

第9章 今後の課題 79

第10章 事業スケジュール

- ・事業スケジュール 82

後付け

- ・基本構想策定委員会委員名簿 83
- ・基本構想策定委員会検討経緯 84

第1章 竹富町文化振興・観光交流拠点整備の背景

1. これまでの経緯

本構想に先立つ平成10年、「竹富町立文化財資料館（仮称）基本構想について（答申）」が発表され、施設の使命として「竹富町の貴重で特色ある記念物、有形、無形の文化財に関する諸資料を体系的に収集・保存し、学術的な調査研究を行い、整理して広く公開展示する。さらに町内の文化財に対する知識と理解を深め、もって地域文化の継承と創造、発展に資する」ことが掲げられ、施設の延床面積は2,000㎡程度とされた。

その後、上記の基本構想に基づき、施設の基本理念と性格、施設機能等を検討した「竹富町立文化財資料館（仮称）建設基本計画について（答申）」が平成13年に発表された。

以下、基本計画に掲載された施設の基本理念、施設の性格について抜粋する。

(1) 基本理念

ア) 資料館は竹富町の文化財に関する資料を体系的に収集、保存、整理し、公開展示及び研究のための活用に供する。

イ) これによって本町の歴史・風土を知り、文化財に関する知識と理解を深め、正しく地域文化を継承し、創造・発展に資する。

ウ) 文化財の適切な保存と活用を通して、町民の郷土学習に供するとともに、地域への愛着の念を深め、文化活動及びまちづくりの拠点としての役割を担う。

エ) さらに、本町の自然、歴史、文化の情報を沖縄県内外に発信する。

(2) 性格

ア) 資料館は、竹富町の歴史とそれを育んできた自然環境、そこから生み出された文化遺産を保存・継承し、町の文化振興に貢献するための施設である。

イ) 資料館は町内に設置される分館と連携し、さらに各島々にある既存の民間施設間とネットワークの整備を図り、町内コミュニティ全体を対象とした文化財センター的機能を持たせる。

ウ) 資料館は、地域活性化の核となる生涯学習型施設として、高度化・多様化する町民ニーズに対応する教育普及活動を行う。

エ) 竹富町内外の文化施設、史跡、観光地とのネットワーク、町内に居住する優れた人材の伝統技術と知識を生かしたネットワークを活用し情報交換を行う。

(以上、基本計画（答申）より抜粋)

現在、この計画は白紙に戻されており、今日の社会動向や利用者ニーズ等を汲み取り、新たな視点で基本構想を検討する。

2. 拠点整備の必要性

地域がその個性を最大限に活かして発展するには、まず地元住民が地域を正しく理解し、先端技術等も取り入れた活用のアイデアを創出して、外へ効果的に発信していく必要がある。今日、竹富町においては急速な観光開発や高齢化などにより、古くから守られてきた自然環境の破壊や、継承されてきた有形・無形の文化の途絶に対する懸念がある。そこで貴重な歴史・文化資源や自然を保管・保存しつつ、それを活用・発信していく術を学びかつ実践する、統合博物館的機能をもつ拠点の整備が求められる。

(1) 郷土の歴史や文化、自然を総合的に学ぶ機会の提供

竹富町には、地域の歴史や文化、自然について総合的に学べる場がない。まず、この地域が、3万年以上前に人類最古段階の海洋進出の舞台となっていたこと、4千年前頃に現れて消えた謎の下田原文化など古代のロマンを感じられる場でもあることなどについて知ることのできる、展示施設が必要である。

さらに、琉球王国と八重山の関係、1637年から1902年（明治35年）にかけて課された厳しい人頭税の影響による人々の島間移動と移住、そうした中で生まれた織物技術など、竹富町の景観や文化が生まれた歴史を体系的に学べる場が欲しい。

また、地域の昔を知る人々の高齢化が進み、Iターン等で新住民が増加している中、観光客のみならず町民においても、町古来の風習や歴史を知らない人々が増えている。祭りや伝統芸能をはじめとする地域特有の文化をしっかりと後世に伝承していく、新しい仕掛けが必要である。

(2) 地域への誇りの醸成と、交流機会の創出

竹富町は、農事と密接に結びついた古来からの豊穰祈願や収穫儀礼行事・伝統芸能などが、今も受け継がれている、国内でも珍しい地域である。これらの貴重な文化資源を、誇りを持って次代へ継承していくためには、町民がそれぞれの立場を超え、世代と地域をまたいで交流しながらその価値を理解する拠点が必要である。

(3) 町の自然・歴史・文化資源の保全、保管

町の歴史や文化、自然史に関する実物資料、標本、文献資料等を収集・保管する施設が不足している。

例えば現在、土器類はコンテナに、民具類は各島に分散して保管されている状況であり、資料の劣化や散逸が懸念される。

拠点整備によってこうした文化資源を良好な状態で保管する体制を構築し、それを継承する重要性について理解を促進する必要がある。

(4) 情報発信力の強化

国内外から多くの観光客が訪れている竹富町は、世界自然遺産推薦候補地となり、世界からの注目度も高まっている。地域の自然環境や文化の保全・継承を図るため、世界に向けた情報発信機能とそのノウハウの強化が急務である。

(5) 新たな観光資源の創造

竹富町には年間 100 万人を超える観光客が訪れているが、現時点では、島間の船便発着時間に合わせた日帰り短時間滞在も多い。

そこで、町の 9 つの島それぞれの魅力を伝えて各島での長時間滞在を促進するような新しい観光プログラムを開発するための、中核的施設が必要である。

(6) 国内外の観光客、町民に対する啓蒙

持続的な自然環境の保全、歴史・文化資源の保護と活用のために、世界から訪れる多様な観光客、そして町民に対して、来町の際のルールとマナーを啓蒙する場が必要である。

3. 構想の目的

**地域の自然・文化を町民が守り誇るための
共通の知識を身につけ、開かれた交流拠点として
まちの未来につなげていく**

国内外から広く観光客が来訪する竹富町において、竹富町の有形・無形の資源の魅力・価値を伝え、町民・観光客等を啓蒙するとともに、これらの人々の交流を促進し、竹富町の自然・歴史・文化資源を継承する人々の和を創造する。

島嶼（とうしょ）型海洋自治体である竹富町は、島ごとに様々な自然と文化を有することが特徴であり、八重山の文化として一つにまとめて伝えることができないほど多様性に満ちている。

現在本町では、島々の独特の歴史・文化を町内外へ伝えるため、町史の編集が進められている。また、伝統的建造物群保存地区整備等による景観づくりや、種子取祭、節祭をはじめとした文化財の保存・活用、伝統芸能の継承活動も行われている。

本拠点施設では、竹富町の歴史・文化を保全するための情報発信を強化するとともに、世界自然遺産推薦候補地として、豊かな生態系、生物多様性、その背景にある自然等についての情報発信機能を有し、環境保全への意識向上、保全活動の活発化につなげる必要がある。

そこで、本町の多様な歴史・文化・自然に関わる資料・情報を一元的に収集・展示・学習できる場をめざし、関連する上位計画等（資料編③を参照）を踏まえて、保全と観光資源化を同時にかなえるために「竹富町文化振興・観光交流拠点」の整備を目指すものである。

4. 社会的背景

(1) 持続可能社会への希求と、世界目標の設定

世界規模での人口の急激な増加、先進諸国や中国における急速な高齢化、開発による都市化が進み、地球温暖化の急速な進展、環境汚染の深刻化が懸念されており、持続可能な社会づくりに向けた早急な意識改革や技術革新が希求されている。

2015年、パリで開催された気候変動枠組条約締結国会議（COP21）において、歴史上はじめてすべての国が温室効果ガス削減への取り組みを約束する「パリ協定」が採択されたが、その後、アメリカの離脱や、未だ批准をしていない国が存在する。

また、同じく2015年、国連本部で開催された「国連持続可能な開発サミット」において、150以上の加盟国首脳に参加のもと、人間・地球及び繁栄のための行動計画として「われわれの世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ」が採択され、2030年までに達成すべき17の目標と169のターゲットからなる「持続可能な開発目標（SDGs：Sustainable Development Goals）」が掲げられた。世界各地で行動の進展がみられるものの、2030年までにSDGsを達成するためには取り組みのスピードと規模の拡大が必要だとして、2020年1月からSDGs達成のための「行動の10年（Decade of Action）」がスタートした。

SDGsの17の目標（以下、国連広報センターホームページより引用）

1. 貧困をなくそう
2. 飢饉をゼロに
3. すべての人に健康と福祉を
4. 質の高い教育をみんなに
5. ジェンダー平等を実現しよう
6. 安全な水とトイレを世界中に
7. エネルギーをみんなに　そしてクリーンに
8. 働きがいも経済成長も
9. 産業と技術革新の基盤をつくろう
10. 人や国の不平等をなくそう
11. 住み続けられるまちづくりを
12. つくる責任　つかう責任
13. 気候変動に具体的な対策を
14. 海の豊かさを守ろう
15. 陸の豊かさを守ろう
16. 平和と公正をすべての人に
17. パートナリシップで目標を達成しよう

(2) 新型コロナウイルス感染拡大に伴う、集客のあり方の模索

2019年に発生した新型コロナウイルスによる感染症が世界的に広がり、感染者は1億人を超え、死者は250万人程度となり、感染はいまだに拡大を続けている。(2021年2月末現在)

感染の拡大により都市封鎖(ロックダウン)が行われるなど、人々の経済活動や日常生活に大きな影響が生じ、人々の直接対面を避けたテレワークや、ネットショッピングの普及など、ITを活用したコミュニケーションが急激に拡大している。

人々の密集を避け、安全な距離(ソーシャル・ディスタンス)を確保するため、観光施設や文化施設、イベント会場などにおける入場制限の実施、スポーツ観戦などの催事においては無観客のインターネット中継のみとするなど、集客のあり方が大きく変化し、模索が続いている。

(3) 我が国の動向と社会教育施設(文化施設)の関わり

我が国が直面する課題と社会教育施設との関わりとして、平成30(2018)年7月、中央教育審議会による「公立社会教育施設の所管の在り方等に関する生涯学習分科会における審議のまとめ」が公表された。その中で、我が国の課題として「少子化による人口減少、急速な高齢化、グローバル化、第4次産業革命の進展など大きな変革の中にあり、地域社会においても、地域経済の縮小や医療・介護の需給逼迫、財政の悪化、人と人とのつながりの希薄化による社会的孤立の拡大など、様々な課題に直面している」ことが挙げられ、「今後より多様化・複雑化する社会的課題を解決しつつ、新たな社会像を実現するため」に、公民館、図書館、博物館などの社会教育施設が果たす役割について「一人一人の生涯にわたる学びを支援するという役割に加え、地域活性化・まちづくりの拠点、地域の防災拠点などとしての役割も強く期待されるようになっており、住民参加による課題解決や地域づくりの担い手の育成に向けて、住民の学習と活動を支援する機能を一層強化することが求められるようになってきている」としている。

また、少子高齢化時代を迎えた我が国の地域・経済活性化の観点から、平成24(2012)年に観光立国推進基本計画が策定され、観光立国実現に向けて国内旅行消費額21兆円、訪日外国旅行者数4,000万人という数値目標が示された。この計画において、「文化についての理解を深めることを目的とする観光」を「文化観光」と位置づけ、その推進に向けては、我が国の豊富で多様な観光資源の主要なものである文化資源の魅力を国内外に伝えることが重要として、文化観光資源の中核となるコレクションをもつ博物館(歴史、芸術、民俗、産業、自然科学等の分野を含む)など文化施設の機能強化が検討されてきた。

これに続き、文化の振興を観光の振興と地域の活性化につなげ、これによる経済効果が文化の振興に再投資される好循環を創出することを目的とした「文化観光拠点施設を中核とした地域における文化観光の推進に関する法律(文化観光推進法)」が令和2(2020)年5月に施行され、拠点計画及び地域計画について、初の大規模認定が行われた。

文化庁では、文化観光の促進に向けて「文化施設がこれまで連携が進んでこなかった地域の観光関係事業者等と連携することによって来訪者が学びを深められるよう、歴史的・文化的背景やストーリー性を考慮した文化資源の魅力の解説・紹介を行うとともに、来訪者を惹きつけるよう積極的な情報発信や、交通アクセスの向上、多言語・Wi-Fi・キャッシュレスの整備を行うなど、文化施設そのものの機能強化や、さらに地域一体となった取組を進めていくことが必要」としている。

(4) 世界の博物館の動向

2019年、ミュージアムの進歩発展を目的とした、世界で唯一かつ最大の国際的 NPO 組織「国際博物館会議 (ICOM: International Council of Museums)」の第 25 回大会が京都で開催された。2019年現在、ICOM には世界 138 の国と地域から約 4 万 5 千人のミュージアム関係者が加入しており、ICOM のすべての委員会が一堂に会する大会が 3 年に一度開催され、ミュージアムの世界的な方向性についての協議がなされる。

直近の京都大会は「文化をつなぐミュージアム ―伝統を未来へー (Museums as Cultural Hubs: Future of Tradition)」をテーマとし、ICOM 大会史上最多の参加者を記録、平和で持続可能なよりよい社会を構築するためにミュージアムが果たす役割が検討され、下記の 5 つが大会決議として採択された。

- ・決議案 1: 『我々の世界を変革する: 持続可能な開発のための 2030 アジェンダ』の履行は人間が地球に対して持続不可能な要求をしている現状を報告し、環境および社会のかつてない危機的状況とその影響について論じている。さらに本決議案では、博物館は信頼できる情報源としてコミュニティの活動のために不可欠な資源であり、現在のグローバル社会において全ての人々にとっての持続可能な未来をイメージし、設計し、実現するにあたり理想的なポジションにある。
- ・決議案 2: 「アジア地域の ICOM コミュニティへの融合」では、アジアは多様な文化が存在する広大な大陸であり、その国や地域の多くに多様な民族が複数の言語を話しながら生活し、それぞれ信仰している宗教も多様であることを論旨としている。本決議案はアジア諸国を国際的な博物館のコミュニティによりよく融合させるため、ICOM はアジアの博物館同士の相互理解を深めると同時に地域の自主性・特性・多様性が尊重されるよう尽力すべきである。
- ・決議案 3: 『Museums as Cultural Hubs』の理念の徹底は、ICOM に「Museums as Cultural Hubs (文化をつなぐミュージアム)」の理念を適用することで柔軟かつ融合的な論議を図るべきであると提案した。さらに本決議案では、博物館の役割である“Cultural Hubs”のコンセプトは歴史および政治的な世代を超えて継承される情報交換の主軸となることであり、博物館は多様な分野を縦横無尽につなぐ役割を担うべきである。

- ・決議案 4：「世界中の収蔵庫のコレクションの保護と活用に向けた方策」では、博物館と文化遺産の専門家に、世界各国に収蔵されているコレクションの保管リスクを低減するべくあらゆる対策を採ることを要求している。さらに同決議案は現在と未来の世代にとっての研究・教育・楽しみに貢献するという博物館の使命を果たすために、文化遺産の専門家には資金の割当に加え、ツールや手法を最大限に活用してほしい。
- ・決議案 5：「博物館、コミュニティ及び持続可能性」は、1973 年の UNESCO によるチリ・サンティアゴ宣言を引用し、コミュニティ・持続可能性・文化的景観に関する ICOM 決議を再確認した。さらに 2016 年のミラノ大会で採択された「拡張された博物館」に関する ICOM 決議を参照した。この決議案は博物館が単に伝統建築やコレクションを有し、確立された学芸の実践を行う場というだけに留まらず、社会・文化・環境・経済の発展に価値をもたらし、国連が 2030 年に向けて実施している持続可能な開発目標（SDGs）に直接寄与することを主旨としている。

(以上、第 25 回 ICOM 京都会議 2019 報告書より引用)

これらの決議から、今後のミュージアムの取り組みとして配慮すべきポイントを下記に挙げる。

- ・持続可能な未来を目指すという世界の潮流の反映
- ・ミュージアムによる、コミュニティを主導する役割の発揮
- ・アジアにおける多様なミュージアムの融合・強化と、世界におけるアジア美術の存在感の発揮、発言力の強化
- ・ミュージアムは、世代、国境や地理を超えて課題解決を図るハブ
- ・文化財の保全に向けた収蔵環境のボトムアップ、危機管理の強化、デジタル化の推進
- ・ミュージアムは、社会・文化・環境・経済の発展に価値をもたらし、SDGs に直接寄与するものとして、持続可能な地域コミュニティと地域活性化、文化的景観の保護・拡大への貢献

第2章 竹富町の概要

1. アクセス

竹富町は、琉球列島の最南端八重山郡に属し、石垣島の南西に点在する16の島々（有人島9つ、無人島7つ）から構成される、総面積334.02k㎡、東西約42km、南北40kmの広範囲に及ぶ。町役場を八重山経済の中心地（石垣市）に置く、特異な行政形態となっている。

南ぬ島（ぱいぬしま）石垣空港よりバス、自動車等で約30分にて離島への基点となる離島ターミナルに到着。

離島ターミナルより各離島へのおおよその所要時間は竹富島：15分、黒島・小浜島：30分、大原・上原：40分、鳩間島：45分、波照間島：80分（フェリーの大きさや波や風の状況によって変わる。）



※竹富町役場ホームページより

<https://www.town.taketomi.lg.jp/administration/access/>

2. 竹富町の社会・歴史的環境、文化遺産・文化資源

(1) 竹富町の社会・歴史的環境

①現在の竹富町

竹富町は、八重山諸島に属する9つの有人島と7つの無人島からなる島嶼の町である。

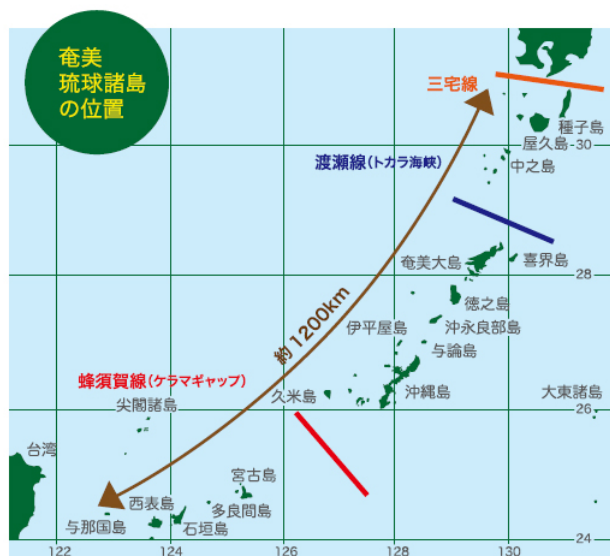
赤瓦の民家や星砂、水牛車、白砂の道など沖縄の伝統的な町並みが残る竹富島や、沖縄県で2番目に大きな島であり、カンムリワシやイリオモテヤマネコなど数多くの国指定天然記念物が生息し、島の90%が亜熱帯の原生林に覆われている大自然を有する西表島、広大なサトウキビ畑や牧場の景色が広がり、ドラマ『ちゅらさん』の舞台となった小浜島、「日本のベストビーチ 2017」で1位に選ばれたニシ浜がある日本最南端の有人島波照間島、島内5つの集落以外はどこまでも牧場が広がり人口よりも牛の数が圧倒的に多い黒島、サンゴ礁の海に囲まれ静かで時の流れを忘れさせる鳩間島や「パナリ」と呼ばれ人魚伝説が残る神秘の島新城島、水牛車で渡る由布島など、豊かな自然と伝統文化の残る、島々が点在している。

人々は自然を暮らしの中に積極的に取入れることで、琉球石灰岩の石垣や魚垣などに代表されるような伝統建築や農林漁業、食文化などを育み、また、その恵みに感謝し崇める自然観は、民謡や祭事といった文化の根源にもなっている。

竹富島をはじめとした伝統的な赤瓦の屋根が続く集落や海、豊穰を祈願する黒島の豊年祭、西表島の節祭など、現代の人々も魅了する伝統文化が数多く伝承されている。

なお、八重山地域の文化は、島々を架け橋として伝搬されたことにより、地域として一体的な共通性を有する一方、島ごとの自然や地域性によってそれぞれの特長を有しており、八重山地域全体としてより魅力的な文化が形成されている。

②地形の変遷と生物



奄美・琉球諸島は、九州の南端から台湾にいたる約1200kmの間に連なる100以上の島からなり、これらの島々はその大きさや標高、地質、気候、島の成り立ちなどに様々な違いを持ち、それぞれの島で微妙に異なる独自の自然環境をつくりだしている。

島という隔離された条件に加え、こうした地史や自然環境の多様性により、昆虫類をはじめ多くの生物が島に固有の進化を遂げてきた。

奄美・琉球諸島は、海水面の上昇や地

(図出典：『奄美・琉球の生物多様性』)

殻変動によって陸地の水没や海の陸地化が起こり、大陸や日本列島と陸続きの時期や、大陸と離れて島となった時期が繰り返され、そこでしか見られない固有種が存在している。

また、奄美・琉球諸島が位置する北緯 24 度～30 度は、亜熱帯気候が出現する地域だが、世界の亜熱帯のほとんどは砂漠や乾燥した草原となっており、黒潮潮流等の影響により温暖で湿潤な海洋性気候が育んだ奄美・琉球の諸島の豊かな亜熱帯の森は世界的にも貴重なものとなっている。

前期更新世（約 150 万年前）にはトカラ海峡が成立しており、この海峡をはさんで生物相が大きく異なる。

この時期には中琉球と南琉球の間の海峡（ケラマギャップ）が成立していたという説もあり、中琉球に遺存固有種※が多い要因のひとつと考えられている。

※遺存固有種：初めは広く分布していた種が、環境の変化や他種との競合などによって分布が縮小され、特定の地域にだけ取り残される場合がある。このような生物を、遺存固有と呼ぶ。

（参考：『風樹館だより第 2 号』琉球大学資料館、『奄美・琉球の生物多様性』環境省 那覇自然環境事務所）

③黒潮と人々の移動、遺跡

旧石器人は、台湾を経由して琉球列島に渡ってきたと考えられており、白保竿根田原洞穴遺跡からは旧石器人の化石が大量に発掘され、そのうち約 2 万 7 千年前～1 万年前の年代を示す人骨が 19 体発見された。

約 2 万 7 千年前の全身人骨は国内最古であり、白保竿根田原洞穴遺跡は、新たに国の史跡に指定された。また、那覇市の山下町第一洞穴遺跡からは 3 万 6500 年前とされる小児の断片的な人骨化石が見つかっている。

港川遺跡では約 2 万 1000 年前の人骨・港川人やイノシシの骨が発掘されており、3 万年以上前から琉球列島に人々が住み着いていたと考えられている。

当時の石器や樹木を使って丸木舟を作り、台湾から与那国島までを航海する「実験考古学」という手法により、2016 年から実験が行われ、2019 年 7 月に与那国島に到着した。

このことから、旧石器人は時速 5km で流れる黒潮を横切る造船・操船技術を持っていたことが明らかになった。

石垣島周辺には海底遺跡も見られ、沖縄県立埋蔵文化財センターによる分布調査や、2004 年より国の補助を受けて「沿岸地域遺跡分布調査」が実施され、このうち重要な水中文化遺産として「屋良部沖海底遺跡」、「黒島沖海底遺跡」、「竹富島沖海底遺跡」の調査が実施されている。

ユネスコでは水中文化遺産の保護と活用を目的として「海底遺跡ミュージアム」という考え方を提唱している。海底に残された遺跡をそのまま史跡公園化し、文化・観光資源として活用しながらその保全も実現する取り組みで、イタリアのバイア遺跡のようにすでに実現

している事例もある。

※バイア遺跡：ナポリの西方約 15km にあり、海底に沈んだ旧ローマ帝国時代の港や別荘の跡などを、海底観覧のできるグラスボートやスキューバダイビングで見ることができる。

(参考文献：『サピエンス日本上陸』海部陽介著、国立科学博物館 Web サイト、日本旧石器学会 Web サイト、東海大学海洋考古学&水中考古学プロジェクト Web サイト)

(2) 有人 9 島の特徴

①竹富島

琉球石灰岩による石垣、フクギの防風林、赤瓦の屋根、台風に備えて軒を低くした平屋の古民家が並ぶ風景は、古い沖縄の集落景観を最も良く残しており、重要伝統的建造物群保存地区として集落全域 38.3ha が国の選定を受け、その代表的な屋敷構えとして「旧与那国家住宅」が国の重要文化財に指定され公開されている。

この風景は、美しい村をつくり、それを美しく残そうとした島民たちの努力の成果であり、その結果現在、観光資源として活かされている。

竹富町は周囲 9.15km、最高標高 33.1m で、全般的に平坦な段丘で構成されている。

隆起サンゴ礁の琉球石灰岩から成る島であるため、他の低島地域同様、水源に恵まれず、竹富島ではかつては船で西表島などに渡って水田耕作をする「通耕」が行われており、現在は記念撮影スポットとして人気の西棧橋も、1970 年代までは通耕のために使われていた。

かつては農機具や穀物の運搬は頭に乘せたり、肩に担いだりして運んでいたが、大正時代に牛車が導入され、それが昭和 40 年代に水牛に置き換わり、今ではこれも竹富島観光の名物となっている。

島の文化財としては、毎年旧暦の 9～10 月の 10 日間にわたって執り行われる種子取祭(タナドゥイ)が国の重要無形民俗文化財に指定されている。

また、竹富島の生活用具(喜宝院蒐集館)842 点も、国の登録有形民俗文化財に指定されている。

その他、国指定史跡の小城盛(先島諸島火番盛の一つ)や、県指定史跡の「蔵元跡」・「西塘御嶽」、町指定の文化財に史跡の「新里村遺跡」「ミーナ井戸」等、12 世紀以来の伝統集落の発展形成と関連の深い歴史的・文化的資源が多数指定されている。

島では「島や村のために仲良く協力する」、「うつぐみ(共同の心)」という言葉が大事にされ、竹富島は「うつぐみの島」と冠されることも多い。

②黒島

牛の島として有名な黒島は、人口約 220 人に対して牛の数が 3000 頭を越えるという、肉用牛の畜産が基幹産業の島である。

黒島も隆起サンゴ礁の琉球石灰岩から成る島であるため水資源に乏しく、さらに表土も薄いことから耕作もままならず、畑作中心の暮らしだった先人たちは、苦しい生活を強いられていたが現在は、西表島からの海底送水が実現している。

また、かつては森林が広がる島であったが、1980年代以降集落以外のほとんどの場所が開墾され、牧草地が広がる風景が形成された。

黒島の海は八重山でもトップクラスの美しさといわれ、仲本海岸は八重山を代表するシュノーケリングスポットであり、西の浜には4月～9月に産卵のためにウミガメが上陸してくる。

黒島は周囲12km、最高標高わずか13mという坂のない平坦な島であるため、観光客が牧場の緑の中をゆっくりとサイクリングし、美しい珊瑚礁の海を眺め、ゆっくりと島で過ごす姿が多く見られる。

島の文化財としては、国指定史跡のプズマリ（先島諸島火番盛の一つ）や、町指定史跡として番所跡、イヌムル（按司の城跡）、イサンチャヤー（古墓）、町指定天然記念物として、アサビシバナ（遊び岩）、桑の老木がある。

豊年祭は、収穫の後、神への豊作の感謝と祈願を行う祭りとして、竹富町の各島々で行われるものだが、黒島の豊年祭のメインイベントのハーリー（爬竜船）競漕が他の地域とは異なり独特のものとなっている。

また、毎年2月に開催される「黒島牛まつり」は、毎年島外から多くの来島者が訪れ、島の一大イベントとなっている。

③小浜島

小浜島は八重山諸島のほぼ中央に位置し、周囲16.57km、島の北側に最高標高99.4mの大岳（うふだき）と平坦な台地・段丘で形成されている。この大岳からは、与那国島を除く8つの八重山の島々を見渡すことができる。

小浜島は、西表島同様、岩石地が豊富な丘陵地や山岳地を抱える「高島」に当たり、土壤に優れ、河川のない島ではあるが、その利水状況は良好である。

島では米やサトウキビの栽培が盛んで、祭祀や信仰、祭りと伝統芸能も豊かであるため、「果報（かふ）ぬ島」と呼ばれている。

島の文化財としては、盆・結願祭・種子取祭（そーら・しち・たなんどうる）の芸能が、国指定重要無形民俗文化財に指定されている。

特に旧暦8月の戌亥のスクミから始まる結願祭は、数多くの芸能が神々へ奉納される。他、国指定史跡の大岳（先島諸島火番盛の一つ）やNHKの連続ドラマ「ちゅらさん」の舞台ロケで民宿「古波蔵荘」のセットとして使用された「大盛家住宅」の主屋・ヒンプン・石垣・井戸の4件が国の登録有形文化財に登録されている。

集落には赤瓦の民家が数多く残り、昔ながらの織物が受け継がれ、祭祀行事がしっかりと継承されている。

観光客は、小浜島の集落に残る赤瓦の昔ながらの沖縄の風景を楽しんだり、サトウキビ畑が続く道シュガーロードのサイクリングが楽しめるほか、大型リゾート施設で南国気分を満喫することができる。

④加屋真島

加屋真島は小浜島の北東約 1.5 km に位置する、周囲約 2 km の小島の平坦な高島である。

集落を形成できるほどの広さはなく、かつては小浜島の島民が島に通い、田畑や牧場として利用していたとされているが、現在は観光施設を管理する人の駐在はあるが、基本的には無人島で、昭和初期に持ち込まれたというウサギが野生化している。

定期船が運航していないため、観光客が加屋真島に行くためには、民間が主催するツアー等を利用して訪れることができる。

観光客は八重山の美しい無人島でシュノーケリング等をして過ごすことができる。

⑤新城島（上地島、下地島）

新城島は、西表島と黒島の間で 2 つの小さな島、上地島と下地島からなり、俗称「パナリ」と呼ばれる。

北の上地島が周囲 6.22 km、最高標高のタカニクが 13m で、南の下地島は周囲 4.83 km、最高標高 20.4m である。両島の距離は約 420m である。

両島とも東側は琉球サンゴ石灰岩の崖になっていて西側は砂浜、砂丘林になっており、上地島は集落があるが、下地島は現在集落がなく牧場が広がっている。

新城島には、近世から近代まで八重山諸島を代表する土器といわれるパナリ焼の里という他の島にはない文化的特徴がある。

赤土に貝を混ぜてつくるゴツゴツした風合いの土器は、パナリで焼かれたためパナリ焼と呼ばれ、人頭税の時代は貢物として作られた。島には焼き窯の跡も遺されている。

また、人頭税としては他島にない貢物としてザン（ジュゴン）を上納することが義務づけられていた歴史もあり、島には現在もジュゴンを祀る御嶽がある。周辺の海は透明度が高く、他の島では見られない美しさがある。

島の文化財としては、国指定史跡の中森（波照間ムリ）とタカニク（先島諸島火番盛のうちの一つ）があり、町指定史跡としてクイヌパナ（港の見晴台）がある。

昔は両島で人口 700 人を数えたときもあったが、復帰前から島外転出が進み、昭和 40 年代前半に 100 人ほどいた人口は昭和 52 年には 10 人台まで減少し、その後横ばいとなっている。

⑥西表島

西表島は沖縄県内では沖縄本島に次ぐ面積を有する島で、周囲 129.99km、最高標高 469.7 の古見岳をはじめ、標高 400m 前後の山地が島の大半を占めている。

平地はほとんどなく、仲間川をはじめ大小 40 以上の川があり、河口から 10km あたりまで海水と淡水が混じり合う汽水域には広大なマングローブ林が広がっている。

原始の姿を残す仲間川周辺のマングローブ林の広さは約 158ha、マングローブ構成種数とも日本最大の規模を誇っており、国の 3 つの天然保護区域に指定され、「保護すべき天然記念物に富んだ区域」として文化庁仲間川天然保護区域、「亜熱帯独特の原生的な天然林」として林野庁森林生態系保護地域保存地区、「亜熱帯を特徴づける自然」として環境省西表石垣国立公園特別地域となっている。

天然記念物として登録されている自然環境は「船浦のニッパヤシ群落」「ウブンドルのヤエヤマヤシ群落」「古見のサキシマスオウノキ群落」「星立天然保護区域」「仲間川天然保護区域」があり、ここに特別天然記念物であるイリオモテヤマネコやカヌムリワシ、天然記念物のセマルハコガメなどの珍しい動物が生息している。

近年はこういった貴重な自然をカヤックやトレッキングで体験・観察するエコツアーが盛んに行われている。

島は、東部と西部の 2 つの地域に大きく分かれており、大原港のある東部地区には 6 つの集落があり、人口は 900 人程度、上原港のある西部地区には 9 つの集落があり人口は 1,400 人程度いる。

琉球王府時代からの歴史のある集落も多いため祭祀も盛んで、祖納・干立地区で行われる西表の節祭（しち）は、国の重要無形民俗文化財に指定されている。

他に、島の文化財としては県指定の茅葺き民家「新盛家住宅」、町が史跡指定を行っている「慶来慶田城翁屋敷跡」や「大竹祖納堂儀佐屋敷跡」などがある。

西表島の産業は、かつて白浜地区に炭坑事業が行われていたこともあるが、主な産業はさとうきびや稲作、畜産、パイナップルやマンゴー等の果物を栽培する農業と豊かな自然環境を活用した観光業がある。他の島々にはない壮大なスケールを持つ島が西表島である。

⑦由布島

由布島は西表島の東岸と小浜島細崎の中間に浮く、周囲 0.12 km のひょうたん形の砂州の島である。

その昔、竹富島や黒島の島民は、西表島の東部に通耕耕作をしていた。その流れからマラリアのない由布島にも、田小屋を作って季節労働的に共同生活が営まれるようになった。

戦後、土地を求めて入植者が増え、由布島小中学校も設置されるまで島民が増えたが、1969 年の台風エルシーの高潮による災害を受け、大多数の人々が由布島の対岸にある西表島の美原地区へ移転した。

その後、島に残った人々により島に亜熱帯植物楽園が作られ、観光地として開発され、西表島から水牛車で由布島へ渡っていくのが観光の名物となっている。

⑧鳩間島

鳩間島は竹富町の最北端に位置する島である。

島はほぼ全域が琉球サンゴ石灰岩で覆われ、周囲 3.9 km、最高標高 33.8mの平坦な段丘で構成されており、アオサンゴ群落のある北海岸をはじめ、そのほとんどが自然のままとなっていて、手つかずの美しい浜が多い。

島としての歴史は古く、島に遺る遺跡、大泊貝塚や中森貝塚から推測すると、鳩間島には15世紀頃には人が住んでいたことが考えられる。

1701年には黒島から60人が寄百姓として入り、西表島まで船を操り遠距離通耕をしていた。

また、漁業も盛んな島で、昭和30年代まではカツオ漁が盛んで海岸線には鯉節工場が建っていた。

島の文化財としては、国指定史跡の鳩間中森（先島諸島火番盛の一つ）や、町指定史跡として下り井戸や町指定天然記念物（植物）の鳩間中森があり、伝統行事では、旧暦6月に3日間に渡って行われる豊年祭等が有名である。

八重山を代表する「鳩間節」の発祥の地であり、そこに謡われる鳩間中森からは雄大な西表島の姿を一望することができる。

現在の鳩間島の人口は約50人で、2006年から石垣島からの定期船の運航が開始され、鳩間島への観光客数も飛躍的に伸びている。テレビドラマ「瑠璃の島」の舞台となったことで、全国的にも知られるようになった。また、毎年5月には島人手作りの、アーティストと来場者が一体になって楽しめる「鳩間島音楽祭」が行われ、音楽祭として人気を集めている。

⑨波照間島

波照間島は日本の最南端に位置する有人島である。島は周囲14.8km、最高標高59.5mと竹富町で西表島に次ぎ大きく、その大部分が琉球サンゴ石灰岩に覆われており、全般的に平坦な台地・段丘で構成されている。

島名の由来は「果てのうるま（サンゴ）」という意味からついたとも言われている。（※諸説有り）

日本最南端の碑がある島の東南部の高那崎は、断崖絶壁の景勝地である。高那には、星空観測タワーもあり、国内で最も南十字星がはっきり見える。

島の北西部にある北浜（ニシハマ）は、真っ白な砂浜と透明度でハテルマブルーと称される美しい海が広がっている。

波照間島には集落ごとに共同商店があり、古い石垣と屋敷を取り囲むフクギ、赤瓦の民家が残る集落のたたずまいは落ち着いた印象を与えている。町内唯一の空港は、現在、休止状態にある。

島の文化財としては、国指定史跡の下田原城跡及びコート盛（先島諸島火番盛の一つ）があり、県指定の「下田原貝塚遺跡」などがあり、伝統行事では旧暦7月14日（旧盆の中日）

に先祖を供養し、豊作と安全を祈願しておこなわれる祭りムシャーマが記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財として登録されている。

波照間島では八重山で唯一、燐鉱石を採掘した島である。戦前の波照間島は夏場にカツオ漁業、冬場は農業という「半農半漁」の産業形態をとっていたが、燐鉱石が発見され、昭和4年から16年まで採掘事業が行われていた。

現在の主な産業はさとうきびを中心とした農業と製糖で、集落を一步出ると一面のさとうきび畑が広がっている。また、近年はもちきび等も注目されつつあり、観光業も伸びつつある。

(3) 竹富町の無人島

竹富町には無人島として⑩仲の神島、⑪鳩離島、⑫ウ離島、⑬外離島、⑭内離島、⑮赤離島、⑯西表島の属島（まるまぼんさん、ヤッサ島、アトク島、平西島）がある。このうちの仲の神島は面積 0.22km²、西表島の南西海上に浮かぶ3つのコブのような岩礁で成り立っている絶海の孤島で、島全体が海鳥の繁殖地として国指定の天然記念物となっている。

（参考文献：竹富町ホームページ、『竹富町史』、竹富島ビジターセンター竹富島ゆがふ館ホームページ、西表野生生物保護センターパンフレット、西表国立公園黒島ビジターセンターパンフレット、離島専門観光情報サイトホームページ（西表島ねっと、竹富島ねっと、小浜島ねっと、黒島ねっと、波照間島ねっと 他）

3. 竹富町の自然環境、世界自然遺産推薦候補地の概要

【気象】

東シナ海の南方に位置し、四面を海に囲まれた竹富町は、四季をとおして気温の変化が少ない。過去における年間平均気温は、24.0℃、湿度 78.4%、年平均降水量 2111.0mm と、温暖多雨亜熱帯性気候である。

雨量は、特に梅雨期と台風期に集中的な豪雨が多い。しかし、台風の少ない年の夏場は、干ばつに見舞われることもある。

【動植物】

生態系の特長は、海・川・山の連続性にある。イタジイやオキナワウラジログシなどの照葉樹林からなる森林生態系、オヒルギ、ヤエヤマヒルギなどマングローブ林からなるマングローブ生態系、アダン、オオハマボウなどの海岸林からなる海岸生態系、多種多様な造礁サンゴ類からなるサンゴ礁生態系など、多様な自然環境に応じて形成された多様な生態系が水や物質循環を通じて密接に関連しており、それぞれが連続性をもって非常に生産性の高い自然環境を作りだしている。

このことは、西表島がヤマネコの生息する世界最小の島として知られていることから明らかで、西表石垣国立公園の生物多様性の高さを表している。

【奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島世界自然遺産 推薦候補地の概要】

平成 15 年、国の「世界自然遺産候補地に関する検討会」において琉球諸島が、候補地のひとつに選定された。大陸との分離結合を繰り返しながら島々が成り立った地史があり、それを反映した多様で固有性の高い生態系を有することと絶滅危惧種の生息地として重要な場所であることが評価された。

さらに平成 25 年の「奄美・琉球世界自然遺産候補地科学委員会」において奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島の 4 地域が「奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島世界自然遺産 推薦候補地」として選定された。

世界自然遺産に登録される為には、その資質を損なわないよう、法律等に基づいた保護措置が必要となる。国立公園やその他の保護区として適切に保全されることが求められている。

推薦候補地の西表島では、観光産業が盛んである一方で、観光に伴う自然環境や住民生活への影響が課題となっており、それに対して来訪者を適切に管理するための取組として、令和 2 年 1 月に西表島における観光の考え方を示す『持続可能な西表島のための来訪者管理基本計画』が策定され、入域料の導入の検討、竹富町観光案内人条例の施行、西表島エコツアーリズム推進全体構想の策定・認定などの検討が進められている。

世界自然遺産への登録の実現は、今後開催予定の世界遺産委員会で審議され決定される見込みである。

【竹富町の主な文化財】

【国指定文化財】

種別	名称
天然記念物	星立天然保護区域
天然記念物	船浦のニッパヤシ群落
天然記念物	仲間川天然保護区域
天然記念物	ウブンドルのヤエヤマヤシ群落
天然記念物	仲の神島海鳥繁殖地
特別天然記念物	イリオモテヤマネコ
特別天然記念物	カンムリワシ
天然記念物	オカヤドカリ
天然記念物	セマルハコガメ
天然記念物	リュウキュウキンバト
天然記念物	古見のサキシマスオウノキ群落
重要無形民俗文化財	竹富島の種子取
重要無形民俗文化財	西表島の節祭
史跡	下田原城跡
重要無形民俗文化財	小浜島の盆、結願祭、種子取祭の芸能
史跡	先島諸島火番盛（小城盛、プズマリ、タカニク、中森〔波照間ムリ〕、コート盛、中森、大岳）
重要文化財（建造物）	旧与那国家住宅

【国選定文化財】

種別	名称
重要伝統的建造物群	竹富町竹富島伝統的建造物群保存地区

【記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財】

種別	名称
無形民俗	波照間島のムシャーマ

【登録文化財】

種別	名称
有形文化財	神山家住宅 主屋
有形文化財	西棧橋
有形文化財	伊古棧橋
有形文化財	なごみの塔
有形文化財	大盛家住宅 主屋
有形文化財	大盛家住宅 ヒンプン
有形文化財	大盛家住宅 石垣
有形文化財	大盛家住宅 井戸
有形民俗文化財	竹富島の生活用具（842点）
有形文化財	神山家住宅 石垣
有形文化財	神山家住宅 水タンク
有形文化財	神山家住宅 井戸

- ・他にも沖縄県指定文化財9件、竹富町指定文化財112件等、多数の文化財が竹富町に現存する。（資料編①参照）

4. 竹富町周辺の施設、関連施設

【竹富町】

名称	島	概要
竹富島ゆがふ館 (西表石垣国立公園 竹富島ビジターセンター)	竹富島	島全体が西表石垣国立公園に指定されている竹富島の自然と伝統文化・芸能を紹介するインフォメーション施設。館名は、来島者と島民の間により良い交流が行われることを願い、「天からのご加護により豊穡を賜る」という意味の「ゆがふ=世果報」から名付けられている。
喜宝院蒐集館	竹富島	日本最南端の寺でもあり八重山の民俗資料を展示した博物館。館内には有名な藁算をはじめ、民具や農具などとともに、陶器、人頭税関係の資料、沖縄の通貨などが所蔵・展示されている。このうち842点が、国登録有形民俗文化財に登録されている。
竹富民芸館	竹富島	伝統芸能を正しく受継ぎ発展させていくための仕事場として、島の人々によって運営されている。竹富島の代表的な織物で、約300年の歴史を持つミンサーをはじめ、八重山上布、芭蕉布などを織る作業を見学することができる。
西表野生生物保護センター	西表島	イリオモテヤマネコをはじめとする西表島に生息する希少野生生物や島の自然について知ってもらい、野生生物への理解や関心を深めてもらう施設。
西表熱帯林育種技術園	西表島	庁舎内展示ホールでは、国内・外の林木育種事例の写真・解説パネル及び技術園の研究成果等を展示。
竹富町資料室 (竹富町離島振興 総合センター内)	西表島	イリオモテヤマネコ、リュウキュウイノシシ、カンムリワシ等剥製を展示。特に、鳥類のはく製が多い。他に農機具など寄贈品を展示している。
黒島研究所	黒島	主にウミガメの研究をしている。研究の成果を一般に伝えるための展示室がありサンゴの標本や民具、さらにウミガメをはじめとする黒島の動物たちを飼育展示している。小さな博物館&水族館的な施設。
黒島ビジターセンター	黒島	竹富町の文化財指定地である「番所跡」に建てられており、黒島の自然や民俗資料について展示しているほか、島の昔の生活様式等を紹介している。

竹富町内公民館（21 館）

竹富公民館	竹富島	上原公民館	西表島
黒島公民館	黒島	中野公民館	西表島
小浜公民館	小浜島	住吉公民館	西表島
細崎公民館	小浜島	浦内公民館	西表島
新城公民館	新城島	祖納公民館	西表島
大原公民館	西表島	干立公民館	西表島
豊原公民館	西表島	白浜公民館	西表島
大富公民館	西表島	船浮公民館	西表島
古見公民館	西表島	鳩間公民館	鳩間島
美原公民館	西表島	波照間公民館	波照間島
船浦公民館	西表島		

【その他】

名称	市町村	概要
石垣市立八重山博物館	石垣市	沖縄県復帰の昭和47年に開館し、沖縄県で2番目の登録博物館である。収蔵品は14,000点余。石垣島だけではなく、八重山諸島全域の資料が展示・保管されている。収蔵品の多くは、歴史、文化に関するもので、古文書などの文献資料、考古資料、民俗資料の中には、他地域に類例のない貴重なものがある。
八重山平和祈念館	石垣市	太平洋戦争の終盤に強制的に疎開を命ぜられた八重山の人々が、マラリアによって多数犠牲になった。その戦争の実相を後世に正しく伝えるために、そして平和のメッセージを世界に発信するために開館。
WWFサンゴ礁保護研究センター（しらほサンゴ村）	石垣市	石垣島での珊瑚礁保存活動の様子がパネルなどで説明されている。
石垣市民会館	石垣市	大ホール（1,010席）、中ホール（300席）、展示室、会議室等からなる文化複合施設。
具志堅用高記念館	石垣市	日本歴代の世界チャンピオンの中で最多連続防衛記録を持ち、石垣市の名誉市民でもある元プロボクサー、具志堅用高氏の記念館。

5. 人口動向

竹富町の人口動向については、平成 28 年 3 月「竹富町人口ビジョン」で考察されており、人口動向の特徴を以下に抜粋する。

- 人口は概ね 4,000 人で推移し、近年は微増傾向
 - ・昭和 49(1974)年頃から続いた横ばい傾向から、平成 11(1999)年以降、移住ブーム、T V ドラマの影響などにより転入者が大きく増加し、近年は総人口 4,000 人程度で推移。
 - ・平成 15(2003)年の各年齢区分の人口を 100 とした場合、年少人口(0～14 歳)及び生産年齢人口(15～64 歳)はプラス、老年人口(65 歳以上)はマイナスで推移。

- 年少人口、生産年齢人口、老年人口の各割合はほぼ一定で推移
 - ・平成 27(2015)年 3 月末時点の年齢構成は、年少人口 16.7%、生産年齢人口 61.9%、老年人口 21.4%。全国と比較すると、全国では年少人口割合が減少し老年人口割合が増加しているのに対し、本町では年少人口、生産年齢人口、老年人口の各割合がほぼ一定で推移。

- 子育て世代を中心とする女性の厚い層
 - ・本町の人口ピラミッドは「ひょうたん型」だが、全国とは異なり生産年齢人口でも若い層と年少人口で 2 つの膨らみを形成している
特に、第 2 次ベビーブーム世代の層が男女とも厚く、生産年齢人口割合の高さにつながっている。また、高等学校がないため、15～19 歳層で進学による流出を要因として極端に少なくなっているが、25～29 歳の層で回復しているのが特徴。
 - ・これらの多くは、I ターンによる社会増加だと考えられるが、これらの子育て世代を中心とする女性の層が厚いため、安定した出生数が確保されている。このことが、極端な少子化になっていない要因だと考えらる。

- 総人口の増減は、転入、転出(社会増減)による影響が大
 - ・平成 11(1999)年以降の社会増加(転入-転出)の外部要因として移住ブーム、T V ドラマの影響などがあつた。平成 19(2007)年以降の社会減少の外部要因として世界金融危機以降の不景気などがあつた。平成 23(2011)年以降の社会増加の外部要因としてリゾート開発の他、L C C の参入や新石垣空港の開港など交通機関の整備などが挙げられる。
 - ・自然増加(出生-死亡)は概ね 0～50 人の間で一定で推移している一方、社会増加は平成 11(1999)年以降は△120～150 人の間で大きく変動している。特に近年は、社会増減の変動が大きく、本町の総人口に大きな影響を与えている。
 - ・5 歳階級別の社会増減から、20～30 歳代の若い世代の転入が多いことが伺える。

- 観光業と農業の2大産業で就業者の4割以上を占める産業構造
 - ・産業別就業者割合は、第1次産業18%、第2次産業7%、第3次産業75%で、このうち観光関連(飲食店・宿泊業)27.6%、農業16.3%が本町の2大就業産業となっている。

- 各地区の人口は増加傾向、波照間地区は一貫して減少傾向
 - ・西表島西部地区、西表島東部地区、小浜地区、竹富地区は増加傾向。
 - ・新城地区、鳩間地区は人口が少ないため変動が大きくなっている。
 - ・黒島地区は、平成16(2004)年頃までは増加していたが、これ以降は減少。
 - ・波照間地区は、一貫して減少傾向で平成2(1990)年を100とすると平成27(2015)年は76まで減少。

【参考資料】 地区別人口動態票（令和2年10月現在）

竹富町地区別人口動態票（令和2年10月末）1/2枚

項目 地区別	世帯数		人口			対前月比				
			男	女	計	世帯数	男	女	計	
竹富	日 本 人	181	163	189	352	2	1	2	3	
	外 国 人	2	2	2	4					
	複 数 国 籍	2								
	小 計	185	165	191	356					
黒島	日 本 人	140	117	115	232	△ 1	△ 1	1	0	
	外 国 人	0	0	0	0					
	複 数 国 籍	0								
	小 計	140	117	115	232					
小浜	小浜	日 本 人	401	321	277	598	5	1	5	6
		外 国 人	10	6	6	12				
		複 数 国 籍	2							
		小 計	413	327	283	610				
	細崎	日 本 人	58	52	61	113	0	0	0	0
		外 国 人	3	3	0	3				
		複 数 国 籍	0							
		小 計	61	55	61	116				
	加屋真	日 本 人	1	1	0	1	0	0	0	0
		外 国 人	0	0	0	0				
		複 数 国 籍	0							
		小 計	1	1	0	1				
新城	上地	日 本 人	10	7	4	11	0	0	0	0
		外 国 人	0	0	0	0				
		複 数 国 籍	0							
	下地	日 本 人	2	2	0	2	0	0	0	0
		外 国 人	0	0	0	0				
		複 数 国 籍	0							
小 計		2	2	0	2					
西表島東部地区	大原	日 本 人	162	145	132	277	0	0	1	1
		外 国 人	1	0	2	2				
		複 数 国 籍	1							
		小 計	164	145	134	279				
	豊原	日 本 人	95	97	96	193	2	0	1	1
		外 国 人	0	0	0	0				
		複 数 国 籍	0							
		小 計	95	97	96	193				
	大富	日 本 人	172	171	139	310	△ 1	2	0	2
		外 国 人	1	1	2	3				
		複 数 国 籍	2							
		小 計	175	172	141	313				
	古見	日 本 人	36	38	33	71	0	0	0	0
		外 国 人	0	0	0	0				
		複 数 国 籍	0							
		小 計	36	38	33	71				
	美原	日 本 人	15	16	17	33	0	0	0	0
		外 国 人	0	0	0	0				
		複 数 国 籍	0							
		小 計	15	16	17	33				
	由布	日 本 人	11	8	4	12	0	0	0	0
		外 国 人	0	0	0	0				
		複 数 国 籍	0							
		小 計	11	8	4	12				
高那	日 本 人	18	12	8	20	△ 2	0	△ 2	△ 2	
	外 国 人	2	2	0	2					
	複 数 国 籍	0								
	小 計	20	14	8	22					
小計	日 本 人	509	487	429	916	△ 1	2	0	2	
	外 国 人	4	3	4	7					
	複 数 国 籍	3								
	小 計	516	490	433	923					

竹 富 町 地 区 別 人 口 動 態 票 (令和2年10月末) 2/2枚

項 目 地区別	世帯数				人口			対前月比			
	男	女	計	世帯数	男	女	計	世帯数	男	女	計
西表島西部地区	船浦	日 本 人	139	113	95	208	△ 6	△ 3	△ 3	△ 6	
		外 国 人	2	2	1	3					
		複 数 国 籍	1								
	小計	142	115	96	211						
	上原	日 本 人	122	117	112	229	0	△ 1	△ 1	△ 2	
		外 国 人	0	1	0	1					
		複 数 国 籍	1								
	小計	123	118	112	230						
	中野	日 本 人	139	103	123	226	4	△ 3	1	△ 2	
		外 国 人	4	2	4	6					
		複 数 国 籍	1								
	小計	144	105	127	232						
	住吉	日 本 人	157	146	135	281	△ 3	△ 1	△ 4	△ 5	
		外 国 人	0	0	1	1					
		複 数 国 籍	1								
	小計	158	146	136	282						
	浦内	日 本 人	57	61	61	122	1	3	4	7	
		外 国 人	0	0	0	0					
		複 数 国 籍	0								
小計	57	61	61	122							
祖納	日 本 人	76	76	70	146	0	0	0	0		
	外 国 人	0	2	0	2						
	複 数 国 籍	2									
小計	78	78	70	148							
干立	日 本 人	59	61	57	118	0	1	0	1		
	外 国 人	1	0	2	2						
	複 数 国 籍	1									
小計	61	61	59	120							
白浜	日 本 人	60	58	63	121	△ 1	△ 1	△ 2	△ 3		
	外 国 人	0	0	0	0						
	複 数 国 籍	0									
小計	60	58	63	121							
舟浮	日 本 人	28	24	19	43	1	0	1	1		
	外 国 人	0	0	0	0						
	複 数 国 籍	0									
小計	28	24	19	43							
崎山	日 本 人	0	0	0	0	0	0	0	0		
	外 国 人	0	0	0	0						
	複 数 国 籍	0									
小計	0	0	0	0							
小計	日 本 人	837	759	735	1,494	△ 4	△ 5	△ 4	△ 9		
	外 国 人	7	7	8	15						
	複 数 国 籍	7									
小計	851	766	743	1,509							
西表島計	日 本 人	1,346	1,246	1,164	2,410	△ 5	△ 3	△ 4	△ 7		
	外 国 人	11	10	12	22						
	複 数 国 籍	10									
小計	1,367	1,256	1,176	2,432							
鳩間	日 本 人	49	33	26	59	0	0	0	0		
	外 国 人	0	0	0	0						
	複 数 国 籍	0									
小計	49	33	26	59							
波照間	日 本 人	277	259	236	495	0	0	0	0		
	外 国 人	0	0	0	0						
	複 数 国 籍	0									
小計	277	259	236	495							
総合計	日 本 人	2,465	2,201	2,072	4,273	1	△ 2	4	2		
	外 国 人	26	21	20	41						
	複 数 国 籍	14									
計	2,505	2,222	2,092	4,314							

6. 観光動向

【観光客数】

竹富町入域観光客数については平成元年では 28.5 万人であったが、平成 18 年より 100 万人を超え、以降多少の増減を繰り返しているが、ほぼ 100 万人を維持している。

島別にみると竹富島が一番多く観光客の約半分が訪れている。次いで西表島、小浜島の順となる。

平成元年～令和元年 竹富町入域観光客数（年別）

	竹富	西表東部	西表西部	西表島計	小浜	黒島	波照間	鳩間	新城	加屋真島	合計
平成元年	86,721	79,203	33,985	113,188	59,661	11,484	13,242	318	1,316	未調査	285,930
平成 2年	92,346	83,304	40,341	123,645	59,113	12,683	13,582	247	1,776	未調査	303,392
平成 3年	116,784	100,180	49,955	150,135	70,466	19,475	13,989	526	1,495	未調査	372,870
平成 4年	129,321	119,134	59,330	178,464	50,058	21,135	14,188	288	1,429	未調査	394,883
平成 5年	128,688	104,271	66,378	170,649	55,454	22,825	11,848	284	1,297	未調査	391,045
平成 6年	113,541	91,482	64,913	156,395	53,807	18,749	16,394	164	1,161	未調査	360,211
平成 7年	109,269	132,112	69,855	201,967	43,282	17,387	14,877	141	1,678	未調査	388,601
平成 8年	114,073	138,946	68,659	207,605	45,622	11,751	14,964	206	1,371	未調査	395,592
平成 9年	130,260	177,493	98,974	276,467	45,948	12,088	13,927	182	1,722	未調査	480,594
平成10年	181,405	198,003	52,826	250,829	53,134	15,348	23,463	232	516	未調査	524,927
平成11年	205,745	215,778	51,725	267,503	55,012	15,980	21,080	384	1,112	未調査	566,816
平成12年	268,289	247,592	37,488	285,080	53,566	11,534	18,553	540	1,780	5,065	644,407
平成13年	246,265	238,505	33,347	271,852	60,217	12,280	10,116	140	680	4,692	606,242
平成14年	299,232	267,468	37,242	304,710	99,292	15,448	9,588	530	1,932	6,989	737,721
平成15年	394,581	321,112	44,993	366,105	121,750	18,146	12,821	586	2,103	7,598	923,690
平成16年	355,565	308,248	42,749	350,997	115,922	17,904	13,538	2,475	1,663	11,772	869,836
平成17年	416,438	308,744	42,087	350,831	161,455	23,245	14,354	3,162	1,240	7,298	978,023
平成18年	424,965	336,138	43,156	379,294	172,686	21,266	16,453	1,974	1,224	7,309	1,025,171
平成19年	443,656	345,094	60,552	405,646	177,783	37,492	20,555	7,962	1,874	6,722	1,101,690
平成20年	467,740	337,138	66,528	403,666	177,062	42,072	30,205	10,106	1,931	5,874	1,138,656
平成21年	382,409	280,183	60,257	340,440	145,982	34,422	26,432	9,150	2,623	4,543	946,001
平成22年	369,874	249,785	54,374	304,159	140,725	30,087	27,567	8,856	3,195	4,101	888,564
平成23年	343,063	212,624	41,387	254,011	112,988	27,319	30,597	5,419	2,596	2,818	778,811
平成24年	388,903	240,570	44,425	284,995	140,892	29,506	25,866	5,911	2,248	2,394	880,715
平成25年	457,207	290,237	56,164	346,401	182,627	28,216	29,725	7,810	3,190	1,944	1,057,120
平成26年	519,641	313,656	66,071	379,727	182,794	30,428	34,744	6,407	3,529	2,150	1,159,060
平成27年	511,413	322,498	65,454	387,952	184,001	28,428	30,365	6,076	3,175	2,182	1,153,592
平成28年	481,823	264,815	65,102	329,917	190,264	23,770	35,921	4,263	2,974	2,679	1,071,561
平成29年	513,328	244,851	70,443	315,294	177,041	23,172	40,963	4,942	2,938	1,957	1,079,635
平成30年	506,573	229,154	72,260	301,414	164,081	25,591	39,478	4,157	3,097	1,796	1,046,187
令和元年	512,388	224,493	65,820	290,313	153,373	23,655	38,212	4,033	3,262	1,354	1,026,590

第3章 基礎調査

施設づくりに活用するための基礎調査として町民調査と事例調査、有識者の意見調査を行う。

町民調査は、町民ニーズと観光ニーズ把握し、施設づくりに活用するため、大きく3種類の調査を行う。

1. 町民意向調査（アンケート）

町民意向調査は、「学校関係者および町民の意向調査」「観光客および観光業の意向調査」「地域関連団体の意向調査」の3種類の調査を行う。回答結果は別紙（資料編②）参照とする。

(1) 学校関係者および町民の意向調査

【目的】

新たな施設の主利用者となる小中学生を含む町民のニーズを把握

【対象】

- ・竹富町内の小・中学校（全13校）の「教員」「小中学生」「保護者」
- ・学校を通じてアンケートを配布・収集し、多数の人々の意見を効率的に収集する。

(2) 観光客および観光業の意向調査

【目的】

観光で竹富町を訪れる人々のニーズや求められる機能・情報を把握

【対象】

- ・竹富町内の宿泊施設の利用客
- ・エコツーリズム協会やダイビング組合に加盟する事業者と利用客
- ・ビジターセンターや野生生物保護センター、各港などの公共施設利用客

(3) 地域関連団体の意向調査

【目的】

自然保護、伝統文化継承、まちおこしなどを積極的に行っている竹富町内の活動団体へのアンケート調査を実施し、竹富町の人材資源と、その意向を把握するとともに、今後の検討、推進の協力を依頼する。

【対象】

- ・公民館長、公民館関係者
- ・自然保護団体
- ・伝統文化継承団体

4. 町民意向調査および有識者意見調査まとめ

(1) 町民意向調査アンケート結果

①施設の特徴

- ・新しくできる施設がどのような施設なら行きたいかという質問には、観光客を除く全ての対象で、「竹富町の歴史や文化、自然が楽しくわかりやすく学べる」が一番多かった。竹富町について知ることができる総合的な博物館が求められているといえる。
- ・次いで、「体験メニューが充実している」「普段見ることが出来ない動物の生態など貴重な映像などが見られる」が多かった。観光客は「星の観察ができる」という意見が一番多かった。地域関連団体では「貴重な文化財などの資料が見られる」という意見も多かった。

②施設のテーマ

- ・新施設で伝えるべきこと・知りたいことについて、教師は「豊かな自然とその保護活動」「歴史」「民俗・文化」「観光情報」のすべての項目をあげた。生徒、観光事業者、観光客は「豊かな自然とその保護活動」をあげるものが一番多かった。保護者や地域関連団体では「歴史」や、「民俗・文化」をあげるものが多かった。

③施設の機能

- ・展示を見る以外にどのようなことができるとよいかという質問には、保護者や教師は「体験教室や講座に参加できる」が一番多かった。生徒や観光事業者、観光客、地域団体では「カフェ・レストランで食事や飲み物を楽しめる」が一番多かった。また、全体的に「乳児連れや高齢者なども気楽に利用できる」という意見も多かった。

④参考となる施設

- ・これまで行った文化施設などで良かったと思う施設と理由について、すべての対象者で西表野生生物保護センターをあげる人が多かった。町内にあり、訪れたことのある人が多いからと思われる。理由としては映像や鳴き声、標本、多様な生物の紹介をしているというものが多かった。

⑤学校との連携

- ・教師の意見として、新施設との連携について、体験学習などの活動で望むことは学芸員による専門的な指導を望む声が多かった。展示や体験活動以外に望むことは、移動博物館・出前事業が一番多かった。新施設の利用による効果については地域の魅力の再発見、感性の高まりを望むものが多かった。

⑥地域関連団体との連携

- ・新施設とどのような連携が可能かという質問には、講師として体験教室の支援や講座・講演の開催支援の連携が多くあげられた。

⑦自由意見

自由意見としては以下のような意見があげられた。

- ・雨天時に活用できるスペースがほしい。
- ・災害時に避難施設として利用できる。
- ・既存施設との役割分担・差別化
- ・帰ってもつながれる仕組みづくり
- ・すべての島への設置
- ・箱モノを新設することへの疑問 等

【町民意向まとめ】

- 「竹富町の歴史や文化、自然が楽しくわかりやすく学べる」総合的な博物館
 - ・体験メニューが豊富
 - ・普段は見られない貴重な動物、星空、文化財などが見られる
- 「豊かな自然とその保護活動」「歴史」「民俗・文化」を主テーマとした施設
- 「体験教室や講座に参加できる」「カフェ・レストランで食事や飲み物を楽しめる」「乳児連れや高齢者なども気楽に利用できる」施設
- 学校との連携では、「学芸員による専門的な指導による体験学習」「移動博物館・出前事業」
- 地域団体との連携可能性は「講師、体験教室の支援や講座・講演の開催支援」

(2) 有識者意見調査アンケート結果

【意見まとめ】

本施設が取り組むべき事業、施設のあり方等について、多く見られた意見を下記に挙げる。

<p>施設のあり方、望まれる機能</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●博物館的な機能に加え、多目的ホール、図書館機能、防災避難場所等が複合された施設 ●町民や観光客が主体的に学習できる中央図書館的な機能 ●町民の活動や発表の場（ワークショップ、交流活動等） ●観光スポットとなる交流促進機能 ・常設的な展示機能は不要で、施設が所有する資料と対話ができたり、疑問や考えを蓄積していくような施設、という意見もあった <p>【研究・収集機能】</p> <ul style="list-style-type: none"> ●竹富町史、文化財保護審議委員会が収集した資料や文献、竹富町に関する研究論文、公文書、学校教育（子どもの知の営み）、産業、人々のなりわい、自然体験記録、各島の言葉（音としてのデータ）等の収集、データベース化 ●行政資料も含む調査研究資料を保存公開する公文書館的な機能 ●専門家の調査研究にも対処できる機能 ・研究機能は不要という意見もあった
<p>取り上げるテーマ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●歴史、文化、それらを育んだ豊かで多様な自然 ●まつり（神事、芸能） ●生活文化、民俗（くらし、民具等） ●竹富町の産業に関わるもの（石炭、カツオ・イカ漁等）
<p>設置のあり方</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●1カ所に集約するのではなく、各島の特色を活かし、施設を分散配置 ●竹富町の資料と対話ができるスペースが各島にあること（公民館、学校の活用等） ●各島の活力を失わないためにも、島のものは各島に保存し、その島で見られることが大事
<p>連携・協働のあり方</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●研究者と連携し、竹富町を素材とした研究成果を町に還元してもらい蓄積する ●公民館施設の充実と、社会教育施設との連携 ●自然関連、農業関連の研究機関や、大学との連携 ●各種連携を可能にするため、多様な主体による協議の場の設置

町民の参画、 人材育成	<ul style="list-style-type: none"> ●町民主体で計画・運営していくしくみづくり ●町民の生涯学習推進、観光ガイド等の研修・講座による人材育成 ●身近な集いの場など、町民参画の受け皿となる
まちづくりへの 寄与	<ul style="list-style-type: none"> ●施設が蓄積した情報（データベース）を、地域づくりに活かす ●島嶼住民の wellbeing(生活福祉)の向上につながる地域循環共生圏 づくりへの対応

第4章 基本理念・方針

1. 本拠点整備の課題

(1) 世界から認知される施設

竹富町は、国内外の観光客が多数訪れる観光立地の町である。

「コロナ終息後に行きたい国」としてアジアでは日本がトップに挙げられており※、コロナ終息後に観光が本格化した際には、日本への観光客が増加することが想定される。

人口減少が進行する日本では、地域経済振興に向けて海外観光客の獲得が重要となっており、竹富町が観光旅行先として選ばれるためには世界の観光客に向けて竹富町のセールスポイントを簡潔なことばでアピールする、わかりやすくインパクトのあるシンボルやキャッチフレーズ等が大切となる。

拠点施設が牽引役となり、竹富町が世界から選ばれる観光地となるよう、世界に発信していく。

拠点施設から国内外への情報発信が期待されており、外国人観光客や研究者などの施設訪問者を含め、世界から広く正しく認知されるためには、展示解説やホームページについて、英語・中国語を含む多言語語対応が不可欠であるため、多言語対応が可能な職員の配置が望まれる。

※日本政策投資銀行と日本交通公社による、2020年6月にアジア8カ国・地域、欧米豪4カ国で暮らす人を対象としたウェブアンケート。アジア居住者では日本が1位、欧米豪居住者では米国1位、日本2位。

<https://www.nippon.com/ja/japan-data/h00803/>

(2) 先端技術導入による新しい学びの場

コロナ禍により世界的にテレワーク、リモート授業が進行し、インターネット通信による情報の取得や学習、電子決済等、ITは人々の生活になくてはならないものとして定着しつつある。

竹富町は東西約42km、南北40kmの広範囲に及び、その中に9島の有人島が点在しており立地の特殊性をもつことから、離れた場所にいる町民に公平・平等な学びを提供するためには、ITの活用が不可欠である。

現在、5G通信が実用化されており、拠点施設における先端通信技術の導入により、豊富なデジタルアーカイブの構築と活用、拠点施設と学校をつないだオンライン授業、ARやVRを活用した臨場感のある歴史学習の提供など、様々な学びの可能性がある。

また、ITの活用による独自のデジタルコンテンツを世界に発信し、施設認知度の向上につなげる等、リアルな場とデジタルな場を融合させた、新しい学びの場を目指す。

(3) 持続性ある事業活動による地域活力の創出

町民人口が約 4,000 人あまりで、財政規模が大きい竹富町においては、施設開館後の運営費や運営人員の確保など、事業の継続性をいかに保持するかが課題である。

竹富町は世界自然遺産候補地として自然環境を守る上で、今後は観光客の入域規制が検討されており、「観光客の数」より「観光の質」を高めることによる地域活力の創出を図る必要がある。

博物館施設は社会教育を主目的とし収益を上げるものではないが、竹富町における新しい拠点施設は、豊かな自然・文化の保全と継承を図るとともに、それらの資源を活用し、地域の人々と協働して新しい観光コンテンツを生み出し、地域経済を潤して活性化につなげる、これまでにない新たな活用のしくみづくりを目指す。

(4) 関連計画等との連携、棲み分け

竹富町では、世界自然遺産登録地として今後ビジターセンター等が設置される可能性がある。

また、沖縄県は生物多様性の宝庫であり、地理的に東アジアと太平洋地域の接点に位置することから、沖縄県への国立自然史博物館誘致活動が現在進められている。

本施設に関連する諸計画を踏まえ、各施設との役割や内容の棲み分けを図りながら構想を検討し、設置効果の高い施設を目指す。

2. 本拠点整備に期待されること

竹富町の歴史・文化の特徴を踏まえるとともに、社会的背景、竹富町上位計画、基礎調査の結果を加味して、本拠点整備に期待される役割を下記に示すものとする。

自らの生きている場所の歴史を知ること 竹富町民としてのアイデンティティを深める拠点となる

自らの生きている地域が培ってきた様々な歴史・文化資源等の意味や価値を知り、島で生まれ育った人、移住してきた人、子どもたち、高齢者まで幅広い町民が郷土への誇りを感じ、立場や世代を超えて竹富町民としてのアイデンティティを共有し、未来の竹富町を創造していく。

自然や時代との関わりの中で生み出されてきた地域文化を学ぶ拠点となる

3 万年以上前に、人々が海を渡って琉球列島に移住し、竹富町の気候・風土と共生しながら暮らしの営みを続けてきた。

農事や信仰と結びついた多彩な祭礼や伝統芸能、長年伝えられてきた風習や伝承などをはじめとする、竹富町固有の地域文化を学ぶ機会を提供する。

竹富町の文化財や島々の独自の文化を守り継承していく拠点となる

竹富町には様々な文化財が存在し、中でも竹富町指定文化財には舞踊・民謡など無形のものが多く、昔を知る人の減少に伴い、その存続が懸念されている。

地域文化に関する資料、映像、音声等を保存・蓄積し、竹富町に独自の文化を守り、継承する。

竹富町で生涯暮らしていくための学びを支援する拠点となる

本施設は、町民および観光客の生涯学習を支援する。

「展示を見る」「体験する」ととどまらず、本施設が持つ情報・知識を活用し、地域文化について自主研究したり、環境共生における先人の工夫を知り今日の課題解決につなげるなど、人々の主体的な学びを促進する。

多様な目的で町民が集うことができ、地域活性化とまちづくりの拠点となる

本施設は、竹富町の文化・観光振興に関する様々な活動を行う。

展示に加えて、イベント開催、研究者の集まるシンポジウムや講演会の実施、また町民の文化活動の場としても機能し、地域の社会、文化、環境、経済活性等に寄与し、本施設のもつ様々な情報をまちづくりに活用することをめざす。

竹富町の島々の魅力を知ることができる観光振興や情報発信の拠点となる

観光客にとって、竹富町の現在をかたちづかった歴史と自然、文化的な背景を知ることで、竹富町により深い興味と愛着をもつきっかけを提供する。

今後、世界自然遺産への登録に伴い、増加が想定される外国人観光客への情報発信を行い、自然だけでなく生活・文化への正しい理解を推進し、年間100万人を越える観光客の「文化観光※」の推進に寄与する。

※文化観光：国の施策「観光立国推進基本計画」で提唱されている、文化についての理解を深めることを目的とする観光

3. 基本理念

(1) コンセプト

南方から海を渡ってきた人々が、3 万年以上前から琉球列島に住み着き、亜熱帯の美しくかつ厳しい自然や、地域固有のいきものと共生しながら、様々な技や知恵を育み、日々のなりわいに務め、有形・無形の多様な文化を培ってきた。

竹富町では農事と信仰、奉納芸能が密接に関連し、祭祀・芸能を通じて文化が口承されて記憶として残され、御嶽と祭祀・芸能など有形と無形の文化財が結びついた独自の文化的景観を構成してきたが、町の基幹産業が農業から観光業へと移行する中、こうした伝統文化の継承が難しくなっている。

先人たちから継承されてきた独自の地域文化の魅力、そしてそれを守り続けてきたことが竹富町ならではの魅力であり、訪れる人たちの心を打つ。

拠点施設は、約 3 万年前から始まる竹富町の人々の歴史、集落の形成、そこに生まれ継承されてきた祭事やなりわい、自然環境を正しく理解し、未来に向けて守っていく役割を担う。

日本最南端に位置し、海外諸国との国境に接する竹富町において、先人たちが育んできた知恵や技、地域共同体の心を活かして継承し、町民がこれからも亜熱帯の豊かな自然と末永く共生し、活用していくための「知」と「交流」の拠点とする。

百年後も竹富町らしく存続していく ための「知」と「交流」の拠点

ナイン・アイランズ ミュージアム
Nine Islands Museum

(2) キャッチコピー※1の考え方

ナイン・アイランズ ミュージアム
Nine Islands Museum

それぞれに異なる特徴を持つ有人 9 島（ナイン・アイランズ）は、島ごとに独自の文化資源や多様な自然環境がありつつ、各島が連携して一つの町をかたちづいている。

9 島全体をフィールドと捉え、自然・歴史・文化の多様性を育んできた生きたフィールドミュージアムとする。

立地特性を活かし、リアルネットワークとデジタルネットワークが融合した、竹富町にしかない「ナイン・アイランズ ミュージアム Nine Islands Museum」※2を展開する。

本拠点施設はナイン・アイランズ ミュージアムの中核施設となる。

※1 キャッチコピーとは、消費者・利用者の関心を呼び、注目度を高める言葉のこと。

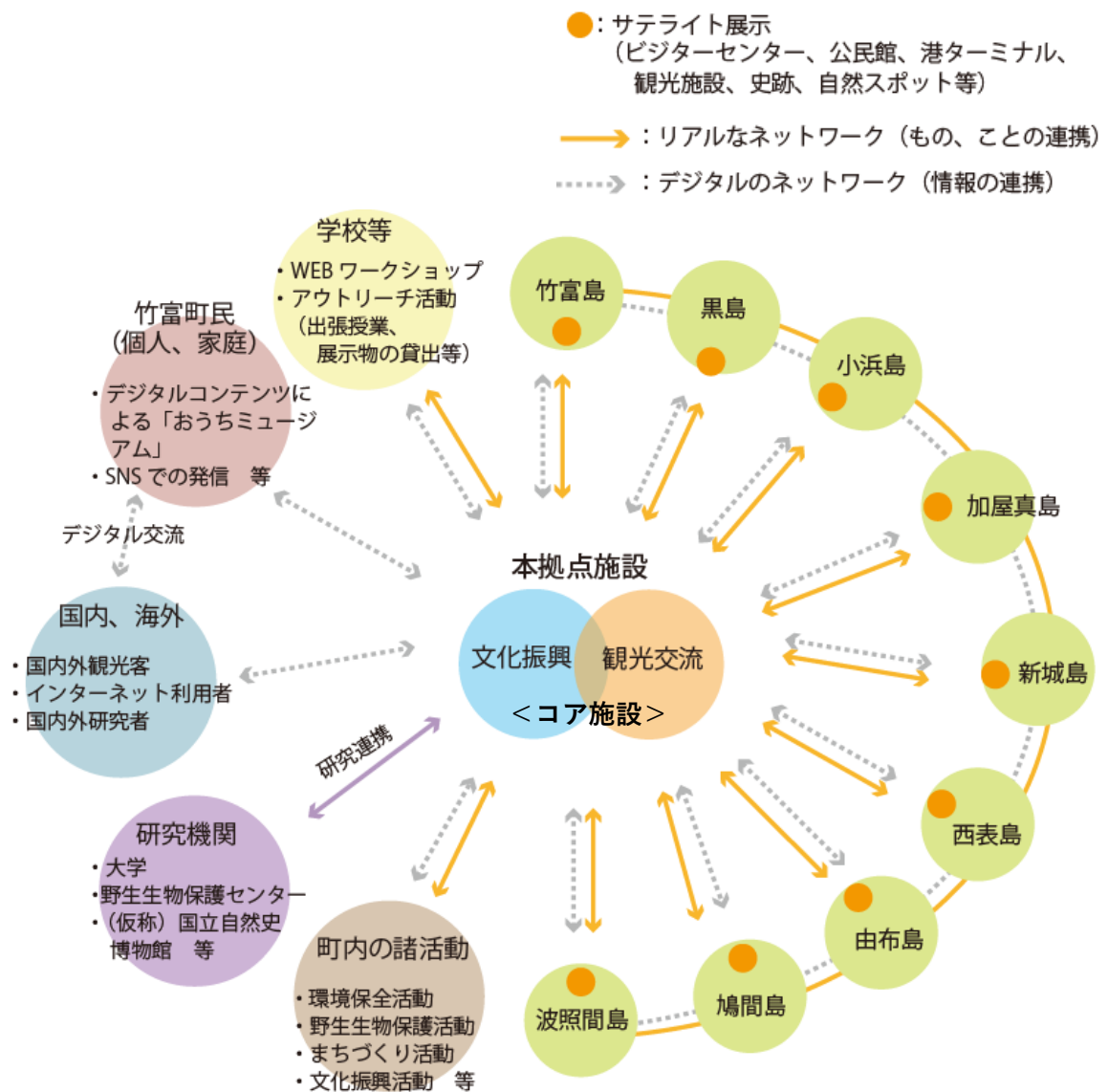
※2 観光すべき場所として Setouchi Islands（瀬戸内）が、米ニューヨークタイムズ紙やファッション誌ヴォーグなどの海外メディアで度々紹介されている。

日本政府観光局では長崎の西海国立公園・九十九島を「映画ラストサムライのオープニングシーンに使われた 99 Islands」として海外に PR、また佐賀県唐津市の 7 島では Karatsu Seven Islands と題するブランディング活動が行われる等、世界の観光客を対象としたアピール力のある名称が必要とされている。

【ナイン・アイランズ ミュージアムのネットワーク 概念図】

各島が離れた竹富町において、拠点施設をコア（中核）にしつつ、各島の文化財を現地で見学できるサテライト展示を設置することが望ましい。

各島に伝えられている文化財には、島外に移動できない資料や、フィールドでしか体験できないもの（祭祀・芸能、景観、自然等）があり、各地域にサテライト展示を設置することで、観光客の回遊促進も期待できる。



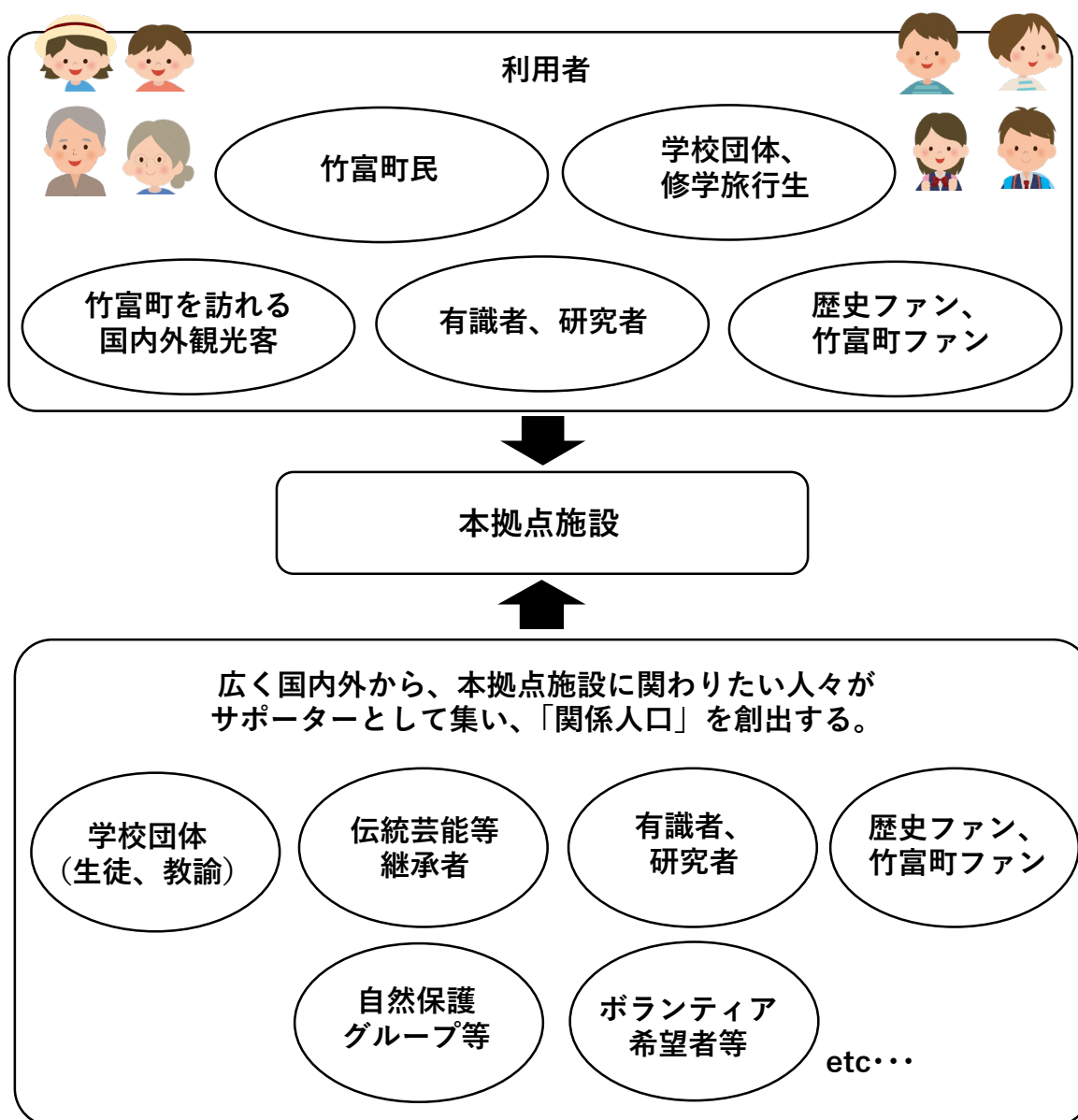
4. 本施設の利用者層

(1) 利用者層の考え方

本施設は子どもから高齢者まで、竹富町民が地元の自然や歴史文化について総合的に学び、多様な地域資源の保全・継承を目指して主体的に活動する場である。

現在、年間に約 100 万人の国内外観光客が来訪しており、今後は世界自然遺産登録地として観光客をはじめ国内外の有識者、研究者の増加も想定されることから、これらの層も取り込みを図る。

竹富町の海洋と島々の自然及び歴史・文化遺産の保全と活用を行い、観光客など多数の利用者にサービスを提供していくためには、行政のみならず町民やサポーターの参画を促し、相互に連携して幅広い事業活動を行うことが求められる。



(2) 関係人口の創出

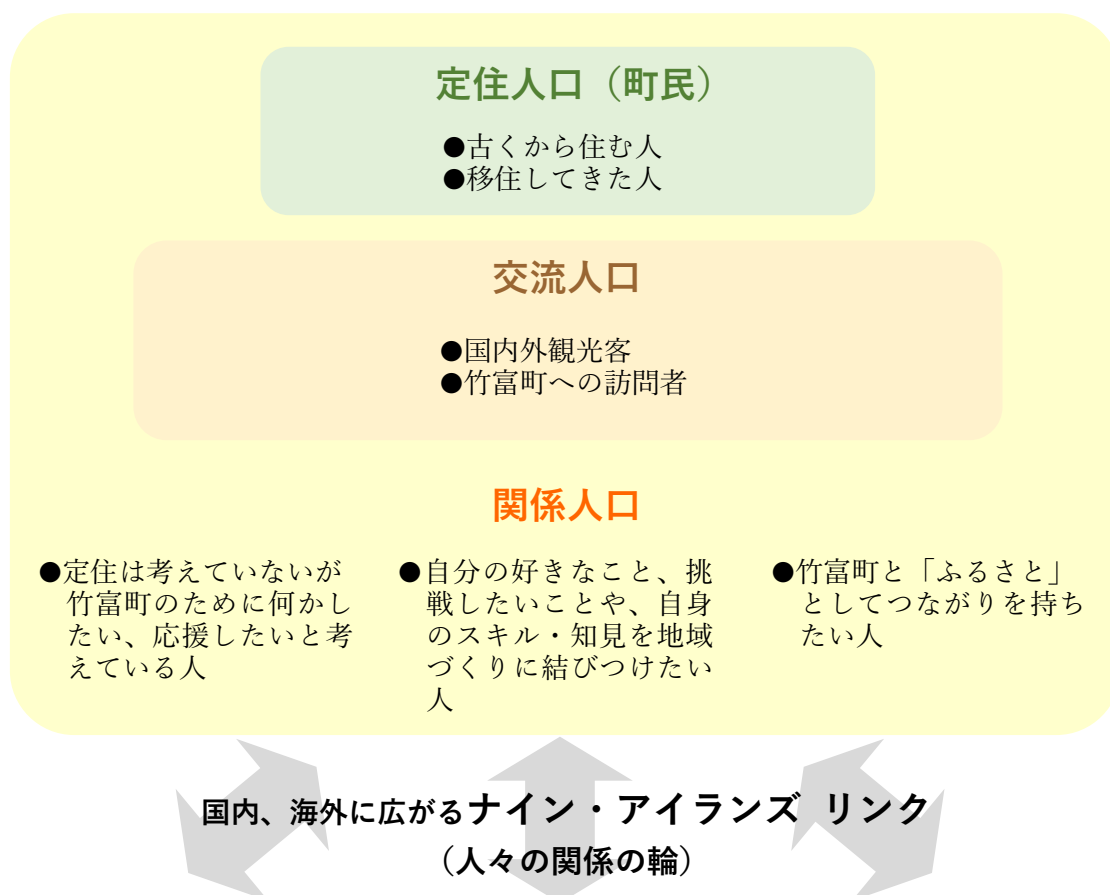
ウィズコロナ、アフターコロナの時代を迎え、博物館や観光施設等の諸活動や集客のあり方に変化が見られる。

コロナ禍以前には、博物館・観光施設は「より多くの人々を集め、来てもらう場」であったが、ウィズコロナの時代を迎えてそれらの施設ではITを活用したコンテンツ配信が進み、世界と瞬時につながる、また一人ひとりとつながって情報発信を行う、いわば「利用者のもとに出かけていく施設」に変化している。

世界的なコロナ禍の影響を受け、入場を再開した博物館には以前の客足は戻っていないこと、竹富町ではオーバーツーリズム防止の観点から観光客の入域制限が検討されていること等を踏まえて、本施設への来館者数のみにこだわるのではなく、いかに多くの人々と良好な関係を構築できるかという視点で、「関係人口」の創出を図る。

竹富町に興味や愛着を持つ人々との関係づくりにより、「観光の質」の向上につなげる。

【関係人口の捉え方 概念図】



ナイン・アイランズ ミュージアムを支える関係づくり

5. 基本方針

【本構想への取り組みの視点】

竹富町においては観光発展に伴う開発が進み、農村集落景観のみならず海辺などを含む文化的景観の保全、自然環境の保全が急務であり、また昔を知る高齢者の減少による伝承文化の途絶への懸念など、竹富町の自然・歴史・文化資源を守り継承するための課題は多く、数年後、数十年後には町の姿が大きく変化し、貴重な自然や文化資源が損失、消失する懸念がある。

P.37～38 で挙げた本拠点整備に期待される役割を踏まえるとともに、他地域では見られない竹富町独自の多様な自然や文化を未来に継承していくため、将来こうありたい姿を明確にし、そのために今日から何をすべきかを考える「バックキャストイング」※の視点を盛り込んで基本方針を設定する。

※バックキャストイング：現在から未来を考えるのではなく、「未来のあるべき姿」から、そこを起点に振り返り、今何をすべきかを考える方法。

バックキャストイングの視点

**竹富町の貴重な自然・歴史・文化資源を
百年後にも変わらず存続させ、
日本最南端の町で生き続けるために**

方針 1. 地域の貴重な資源・資料の保存継承

竹富町の貴重な資源・資料を調査・研究し、各島に分散保存されている資料を良好な状態で継承し、公開および展示活用をする場を目指す。

「調査・研究」「収集・保存」の活動は文化振興施設の基盤であり、収集・保管した資源・資料を活かして展示公開、教育普及、交流サービス等の活動を行うものとする。

伝統芸能、祭祀、暮らし、生活民具（素材や作り方も含めて）などの古い記憶をもつ高齢者は年々減少しており、昭和初期生まれの世代は90歳代になりつつある。

高齢者へのインタビューによる音声記録、伝統芸能の映像記録など、貴重な記憶のアーカイブを現段階から始め、無形文化財の記録を集積していくことは非常に重要であり、できる限り早い着手が望まれる。

方針 2. 多様な自然・文化の体験による、その価値への理解

本拠点施設は竹富町の歴史を学び、島々の多様な自然、文化について子どもから高齢者までわかりやすく総合的に学べる場として、体感的な展示、直感に訴える空間演出や触れる展示の導入、各種講座の開催、イベント実施等、博物館ならではの体験的な学習を提供し、竹富町の自然・文化資源の価値を伝え、その保全継承および活用の大切さを理解させる。

さらに、有人 9 島全体をフィールドミュージアムと捉え、島ごとの独自の自然や文化を現地で体験できるように誘う、観光ガイドセンターとしての機能を併せ持つ。

方針 3. 町民の文化活動、交流促進による地域コミュニティ活性化

伝統的なものづくり、芸能、行事等の継承に携わる町民の方々の活動を支援し、あるいは本拠点施設がその活動の場となり、子どもから高齢者まで多世代の町民が集い、交流する場を目指し、町民の文化活動に「使ってもらえる場」とする。

高齢者と若年層の世代間ギャップ、新しく移住してきた人とのコミュニケーションギャップを埋め、地域コミュニティを長期的に保持するため、本施設に共感して活動や支援を行う人材を育成する。

方針 4. 経済活性、地域活性につながるレジャー体験の提供

国内外観光客にとって竹富町への玄関口（ゲートウェイ）となる本施設では、観光情報の発信を行うとともに、観光客の滞在時間を拡大する多様なアクティビティの提供を図る。

本施設に蓄積された情報・資料を活かし、伝統的なものづくり体験プログラム、屋外観察プログラム、史跡巡りツアー等、「文化観光」の促進につながる多様なプログラムの開発を検討する。

本施設単独ではなく、観光事業者、地域団体等との連携を図り、地域が一体となって魅力的なレジャー体験の提供をめざす。

方針 5. 世界への発信力の保持

竹富町を含めた琉球列島は、南方の文化が海を渡って伝わってきた地域であり、地球規模

での人々の移動により動植物や文化が伝播し、町に根付いていった。

過去から現在における竹富町とアジア、世界との関わりが感じられるようなダイナミックな視点を盛り込み、アジアをはじめ世界各国から訪れる人々が「自分が住む地域と竹富町とのかかわり」や「世界と国境を接する海洋自治体・竹富町」について認識し、共感を持つような情報発信や展示体験を行う。

国際化・情報化時代であることを鑑み、IT を活用したデジタルコンテンツ、SNS、専用アプリケーションなどによる発信を行い、一人ひとりをつなぎ、同時に地域や世界との交流を創出する。

また、ICOM の提言（P.10 参照）には博物館が SDGs に寄与することが盛り込まれており、世界自然遺産推薦候補地に立地する本施設は、SDGs に掲げられている「住み続けられるまちづくりを」「海の豊かさを守ろう」「陸の豊かさを守ろう」等の目標に対する竹富町での様々な取り組みを発信し、世界から訪れる利用者の啓蒙を図る。

世界自然遺産推薦候補地として、竹富町の貴重な自然、いきもの、文化等の魅力を伝え、世界に発信する機能の強化を図る。

さらに、竹富町は、2006 年にユネスコの世界文化遺産登録に向けた暫定リストへの追加に向けて「黒潮にはぐくまれた亜熱帯海域の小島『竹富島・波照間島』の文化的景観」について、文化庁に提案書を提出して評価を受けたが、「琉球王国のグスク及び関連遺産群」への追加を沖縄県から提案され、竹富町として断った経緯がある。

今後も再提案の可能性は残されており、世界自然遺産、世界文化遺産が複合した、世界でも数少ない複合遺産の日本初の登録地となることも期待される。

このような背景を踏まえて、「ナイン・アイランズ ミュージアム Nine Islands Museum」を世界にアピールしていく。

5. 施設整備の方向性

(1) 拠点施設の展開の考え方

今日、竹富町では多数の観光客が来訪する一方、観光開発の進行に伴う環境破壊や、伝統芸能など古くから継承されてきた無形文化財の途絶の危機等、課題も抱えている。

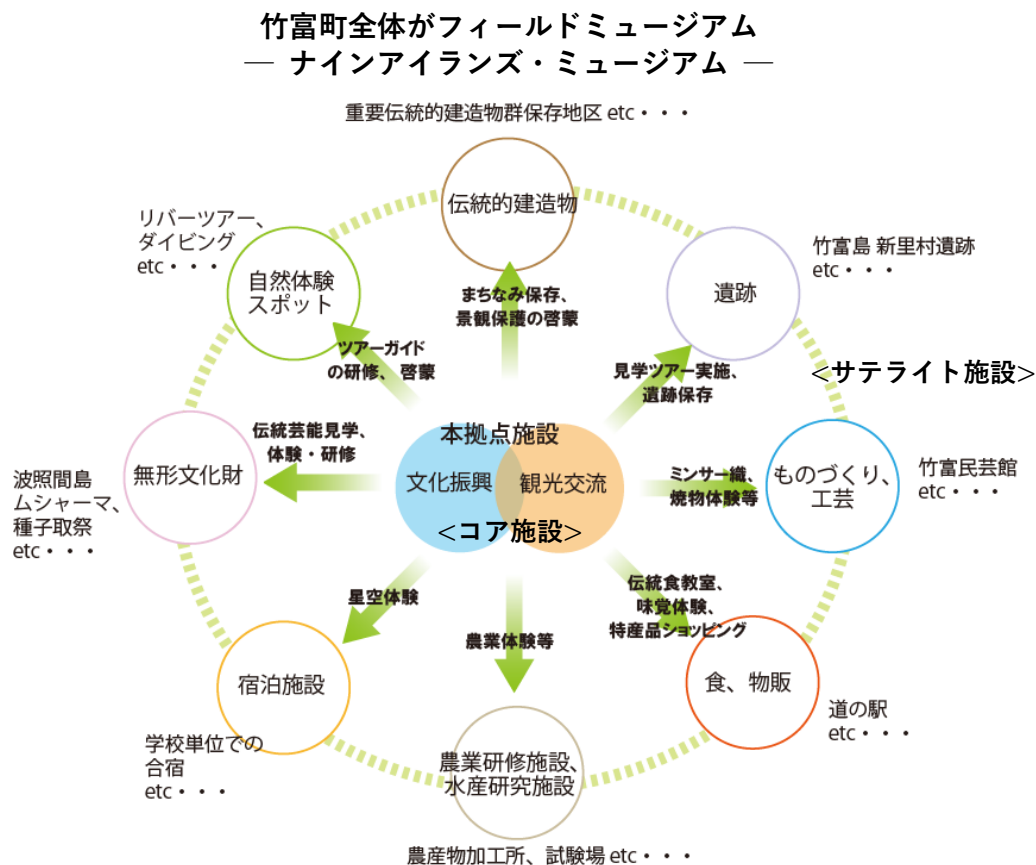
竹富町には島ごとの多様な自然環境、それを背景にした産業と暮らし、有形・無形の豊富な文化財が存在し、町全体がフィールドミュージアムであるといえる。

本拠点施設は単体のハコモノとして「見るだけ」の場ではなく、有形・無形の様々な文化財を保存・継承し、利用者がその情報を得てフィールドに出かけていくきっかけを与え、利用者が竹富町の自然・歴史・文化をフィールドで実体験してその価値に気づき、継承していく動機づくりを行うべきである。

また、観光客や一般町民のみならず、ネイチャーガイドなど観光業に携わる人々に対しても、竹富町の自然や文化を守り、フィールドミュージアムを末永く維持していくための啓蒙を行い、人材育成を図る必要がある。

本拠点施設をフィールドミュージアムにおける拠点（コア施設）とし、本施設単独で完結するのではなく、周辺施設や関連機能をサテライト施設と位置づけて連携および相乗を図り、経済波及効果の創出、地域活力の向上を目指す。

【フィールドミュージアムの拠点としての展開概念】



(2) 本拠点施設において想定される主な機能

本施設の理念、方針に沿い、また町民意向調査等を踏まえて、本施設で想定される施設機能を下記に挙げる。適切な施設機能について今後も精査を続けるものとする。

1 エントランスホール	待ち合わせ、団体の集合、総合受付などを有するロビー。
2 観光案内機能	観光情報の提供、イベント情報、特産品紹介などを行う。 各島の見どころ紹介映像の上映、情報検索なども想定される。
3 展示機能	常設展示室 : 資料や標本などを常設する展示空間。
	企画展示室 : 特別展示、企画展示を行う空間。 展示替えに対応する展示準備室も想定される。
	子ども向け展示室: 未就学児など、低年齢の子どもと親が 利用する、遊びと学びの展示。
	体験展示室 : 触れる展示 (ハンズオン) に特化した展示。 例) 道具、楽器、着せ替え等
4 収蔵機能	一般収蔵庫 : 標準的な収蔵環境で保存可能な土器、石器などを保管する。
	特別収蔵庫 : 重要文化財など、特に厳密な温湿度の管理が必要な資料を保管する。
	一時保管庫 : 展示替え資料や、借用資料などの一時保管室。
5 調査・研究機能	研究室 : 学芸員などの研究者の作業室
	研究に付随する機能として、資料庫 (書庫)、写真室、実験室などが想定される。
6 教育普及機能	講座室、集会室、学習室 : 講座の開催や、自習に供する空間。
	図書室 : 図書閲覧に供する空間。
	学校団体向けの実験室なども想定される。
7 交流・サービス機能	多目的ホール : 発表会、シンポジウム等を開催する。
	休憩・飲食スペース: 休憩、軽飲に供する空間。
	ショップ : 観光ニーズを満たす土産、本施設のオリジナルグッズ、書籍などを販売する。
8 事務・管理機能	事務室 : 職員の事務スペース。
	館長室 : 施設責任者の部屋。
	打ち合わせ、応接室 : 会議用の部屋。
9 その他、共用部	更衣室、トイレ、給湯室、倉庫等。

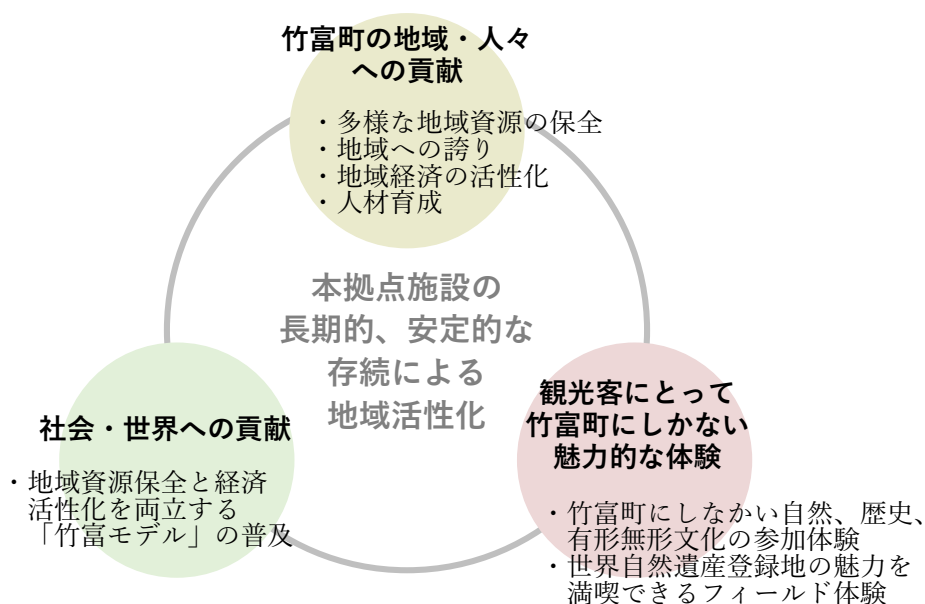
第5章 事業活動・施設機能

1. 事業活動の基本方針

拠点施設の長期的な存続に向けて、従来の博物館スタイルから脱却し、本施設単独ではなく周辺の施設や事業者と連携しながら、観光資源として成り立つ施設、そして新たな観光資源を生み出す施設となることが求められる。

竹富町の地域や人々に貢献し、また観光客にとっては竹富町唯一の魅力ある体験ができ、社会・世界にも貢献する、竹富町だからこそ可能な新たな仕組みづくりを目指す。

【事業の基本方針 概念図】



【本事業の取り組み視点】

本拠点施設は他施設とどのように違うのか：**差別化の発揮**

利用者（顧客）にとってうれしいことか：**利用者価値の提供**

地域がどのように潤うか：**収益性の確保**

竹富町の地域資源を保全しつつ観光・経済を活性化し、地域に役立つ場とする。

本事業取り組み視点、事業の展開イメージを踏まえ、具体的な方針を下記に挙げる。

方針 1. 竹富町にしかない貴重な地域資源をできる限り保全・活用し、他の地域にはない差別化を図る

事業活動 1：収集保存 文化財等の収集と保管

事業活動 2：調査研究 竹富町の自然・歴史・文化の調査・研究

方針 2. 竹富町でしか味わえない、利用者にとって価値ある発見・体験の提供

事業活動 3：展示 本拠点施設や町民による活動・研究成果を公開

事業活動 4：教育普及 体験学習や講座等、利用者の主体的な学びを支援

事業活動 5：交流・観光 交流促進、滞在時間を拡大するレジャーの提供

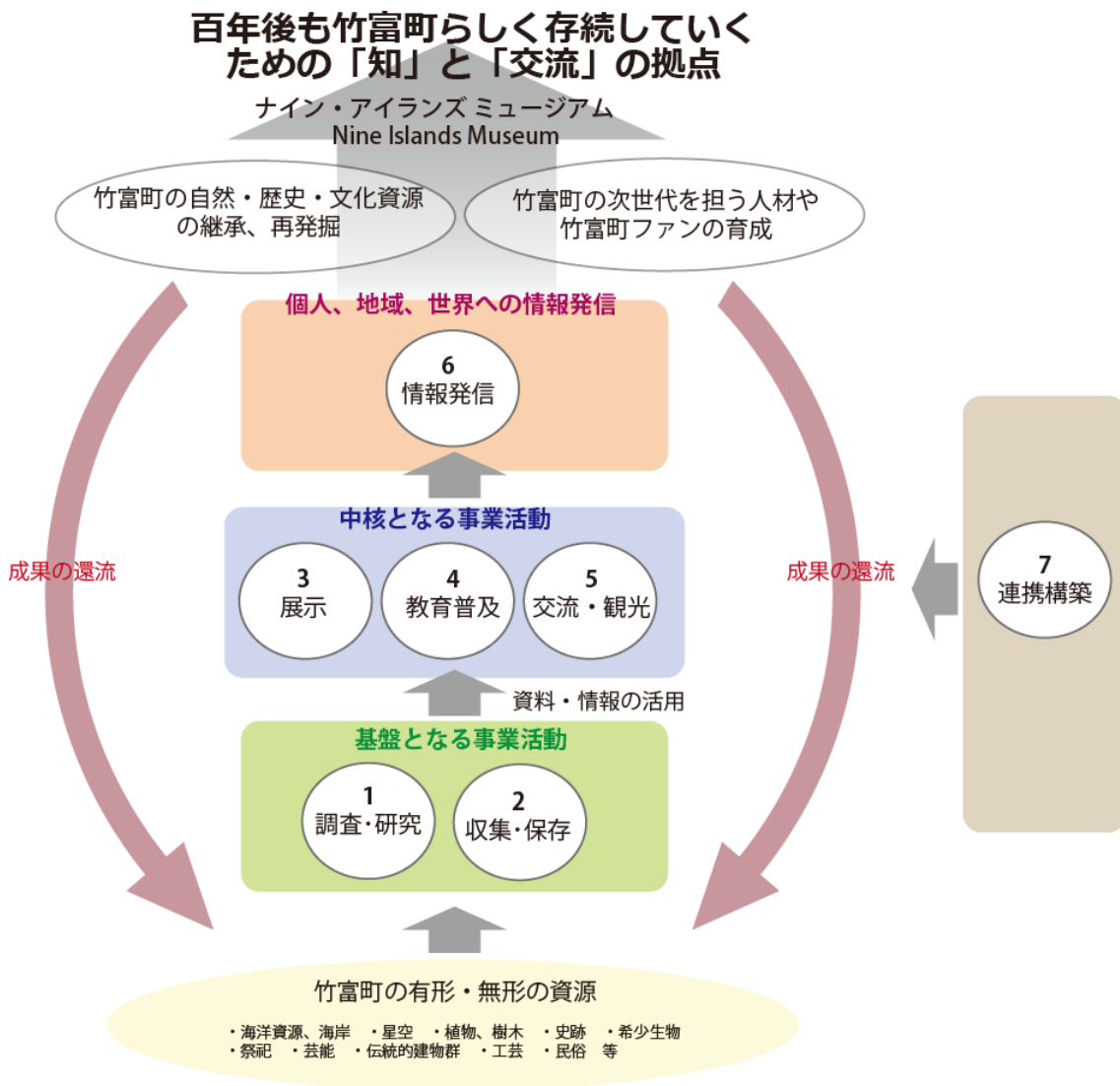
事業活動 6：情報発信 一人ひとりに向けた発信と同時に、フィールドミュージアムの玄関口として世界への情報発信

方針 3. 地域経済が潤う多様な事業の創出、民間事業者の参入機会の拡大

事業活動 7：連携構築 これまでになかった多様な事業活動のための連携

【事業活動の概念図】

本施設における調査・研究、収集・保存活動が基盤となり、資料・情報を活用して展示、教育普及、交流・観光事業を行い、また個人・地域・世界への情報発信を行う。
 新たな地域資源の発掘や、人材育成につながるよう、活動成果の環流を創出する。



2. 事業活動案及び、本施設が有すべき機能

(1) 収集保存

①基本方針

竹富町の豊かな自然・歴史・文化に関する資料を収集し、その散逸を防ぎ、未来への遺産として後世に引き継ぐ。

②事業の展開

1) 収集保存の対象

- ・竹富町の歴史・文化・自然に関する資料を体系的に収集し、適切な環境下で保存する。
- ・調査・研究活動や展示テーマ、体験学習プログラム等に応じて定めた方針に基づいた収集活動を継続的に実施する。収集した資料は、展示やデジタルコンテンツ、データベースなどの情報発信手段により、幅広く公開する。
- ・竹富町には祭祀、芸能をはじめとする無形文化財が多く、文字ではなく口承によって伝えられていることから、無形文化財、昔の暮らしの記憶などの映像、写真、歌や口承の音声等を撮影・記録することは重要である。
昔を知る人々の高齢化が進んでいることから、これらの撮影・記録に早期から着手し、成果を蓄積していく。

2) 収集の方法

- ・竹富町の歴史・文化・自然に関する重要資料は研究者や研究機関とのネットワークを活かし、所在を把握し収集に努める。
- ・歴史的価値のある資料の寄贈・寄託を受け入れる。なお、収蔵量には限りがあるため、寄贈・寄託を受ける基準を早期に制定する。

3) 資料の保存・管理

- ・既存資料および新規収集資料にあわせて、保存環境の整備ならびに適切な収蔵機能の確保を目指す。
- ・資料の形態や種類、材質等の特性に応じて適切に保存する。
- ・高温・高湿度に対応した収蔵設備を整備する。
- ・多くの博物館では、時間経過とともに収蔵空間の不足が生じており、長期的には出土遺物や標本などの文化財の増加で収蔵空間の拡張は避けられないため、施設計画段階で建物の平面計画や用地での配置においてあらかじめ考慮する必要がある。

4) 資料の修復

- ・破損、劣化した資料は、適切な修復を図る。このための屋内及び隣接する屋外での必要スペースを、施設計画段階で考慮する。

5) 資料のデータベース化

- ・調査研究を促進し、幅広い人々への還元を図るため、収集した資料を系統的に分類・整理し、データベース化を行う。また、データベースをホームページ等で一般に公開することも検討する。

(2) 調査研究

①基本方針

収蔵資料および展示資料等の調査研究、現地調査等を進め、竹富町の歴史や文化、自然に関する研究拠点とする。

八重山広域圏全体を見据えて地域学※的な視点も取り入れるなど、竹富町について基礎的、総合的な学術情報を蓄積する。

※地域学：現地研究（フィールド科学）に根ざして人文科学・社会科学・自然科学など、複数の学術分野をまたいで、地域にかかわる研究を統合的、俯瞰的に再編成しようとする学問的営為
（『地域学の推進の必要性についての提言』日本学術会議太平洋学術研究連絡委員会
地域学研究専門委員会 より引用）

②事業の展開

1) 竹富町の歴史・文化・自然に関する調査研究

- ・原始から現代に至るまでの竹富町の歴史および文化、自然等に関して調査研究を行う。

2) 博物館活動に関する調査・研究

- ・学校教育や生涯学習との連携、資料の保存科学、展示学、情報発信手段など、これからの博物館活動のあり方について研究を進める。

3) 収蔵資料の活用

- ・収蔵資料は、館外部の人々の研究活動にも役立てられるよう、その利活用を図る。

4) 調査研究にあたる人員の配置

- ・本拠点施設が扱う各分野（歴史・文化・自然等）を担当する学芸員の設置を検討する。

5) 調査研究の連携

- ・他の博物館や大学等の研究機関、各種団体等と連携した調査研究を行う。
- ・世界自然遺産に関するビジターセンター等と連携しつつ、その保全の歴史や地域活動などに関しての情報を提供し、また他の世界自然遺産保護の状況等に関する研究や情報交換を行う。

6) 研究成果の発信

・調査研究の成果を積極的に発信し、市民や社会に還元する。その方法は、展示や講座のほか、紀要・目録・報告書等の出版物、またマスコミや、各種 SNS も含めたインターネット等の各種媒体を通じて行う。

(3) 展示

①基本方針

施設として基盤となる資料収集、調査研究の成果を還元・反映し、竹富町の歴史・文化・自然をわかりやすく魅力的に伝える。

遠隔地からもアクセスできるデジタル展示も取り入れ、また利用者の直感に訴える演出や、参加体験性のある展示、利用者の疑問に応える双方向性のある展示を行う。

本施設単独で完結するのではなく、有人9島と連携し、本施設が各島に出かけていく出張展示や、各島をテーマとした企画展示等を行う。

IT ツール等の導入により、利用者の知識レベルに合わせた動画や音声による解説、英語・中国語を含む多言語解説、バーチャル技術を使った解説等を提供し、世界各国からの来訪者に対応して多言語解説を導入する。

②事業の展開

1) 観光案内

・観光客や町民へ竹富町の全体像や観光案内、イベント案内、特産品紹介等を行う。

2) 常設展示

- ・竹富町の歴史・文化・自然を町民や来訪者が理解できるようにする。
- ・竹富町を訪れた観光客、また町内外の子どもの校外学習の利用にも供するため、映像・音声・模型・参加体験型（ハンズ・オン）展示等の手法も取り入れ、誰もが親しめるわかりやすい内容にする。
- ・展示解説スタッフによる展示ガイドや、学芸員によるミュージアムトークを行うなど、利用者の理解促進につながるサービスを提供する。
- ・観光ニーズに対応したエンターテインメント性のある体験の提供や、IT を活用したデジタル展示を導入する。

3) 企画展示

- ・常設展示とは異なる視点でテーマ性・話題性のある企画展を開催する。また町民や、有人9島の施設の協力による交流展示なども行う。
- ・展示室として、多種多様な規模・内容に対応できるフレキシブルな空間を整備する。
- ・他施設から借用した資料を展示することが想定されるため、重要文化財の展示に対応し

た空間や設備を導入すべきか、検討が求められる。

4) 体験展示、子ども向け展示

- ・触れる展示、民具づくり体験等様々な体験メニューの提供や屋外を利用した展示を行う。
- ・未就学児の親子連れが遊びながら利用できる子ども展示の設置を検討する。

5) サテライト展示

- ・各島が離れた竹富町において、各地域にサテライト施設を展開する。
屋内展示、フィールド（屋外）展示、光通信や5G等を活用したオンラインによるデジタル展示を検討する。拠点施設は、デジタル技術を活用するなどして、これらサテライト施設を連携・支援し、各島の情報を得るとともに、竹富町全体の年中行事などの情報共有できるよう運用し、地域住民および観光客の需要に応えるよう質の高い情報を提供する。

(4) 教育普及

①基本方針

子どもにとっては実際にモノやコトに触れあえる場、大人にとっては生涯学習の場、観光事業者にとってはガイド人材の育成の場として、町民や来館者が自ら興味を持ち楽しく学べる場を目指す。

②事業の展開

1) 町民を対象とした教育普及事業

- ・竹富町の歴史・文化・自然への興味を喚起する講座や講演等の学習機会を提供する。

2) 観光事業者、ツアーガイドを対象とした教育、研修

- ・世界自然遺産登録地の豊かな自然や希少生物を将来にわたって守るため、竹富町の環境、自然についての知識、最新情報を提供し、エコツーリズムを担う人材を育成する。
- ・竹富町に興味をもつ観光客に対して正しくガイダンスができるよう、竹富町の歴史、生活文化、芸能等についての基礎知識を学ぶ機会を提供する。

3) 子どもたちへの教育支援

- ・子どもたちの郷土への誇りと愛着を育むため、学校教育との連携を図り、地域の歴史・文化・自然について学び、理解を深める体験型ワークショップや歴史講座等の学習機会を提供する。
- ・各島が離れていることを踏まえ、学校へ学習教材の貸出や出前講座、展示ユニットなど

の提供を行う。

- ・施設利用時の理解を深めるワークシートや、来館前・来館後の予習・復習に活用できるデジタルコンテンツの配信等、学習ツールの開発を行う。
- ・小中学生が放課後に立ち寄り、利用できる施設とし、自習室や集会室などの場を用意する。また、生物や歴史等に関する課外活動（部活動）の受け入れを図り、学芸員によるアドバイスが受けられる「放課後相談室」などの実施を検討する。

4) 学習プログラムの開発

- ・施設内だけでなくフィールドツアーも含めた学習プログラムを開発し、町民だけではなく観光客にとっても魅力的なプログラムを実施する。

5) 文化活動の促進

- ・町民の文化活動を支援する場（講座室、ホール、図書室等）を用意し、町民が活動に参加し、発表できる機会を提供する。
- ・本施設の調査・研究活動に、子どもや町民が参加できるしくみづくりを行い、町民の生涯学習機会を拡大し、地域の自然・歴史・文化の探求や、有形・無形資源の保全・継承のムーブメントにつなげる。
- ・調査研究のみならず、資料のデータベース作業、ミュージアムガイド、体験指導員などへの町民や竹富町ファンの参画を図り、持続性可能なしくみづくりを行う。

(5) 交流・観光等

①基本方針

多くの観光客が訪れる立地条件を活かし、観光客を取り込み、竹富町でしかできない観光体験を提供する。また、竹富町の各島々の魅力や情報を伝え、各島々におけるサテライト展示やフィールドに誘導する。

②事業の展開

1) インフォメーションサービス

- ・訪れた観光客に、竹富町全体の魅力や情報を伝える「ビジターセンター」的役割をはたす。
- ・竹富町内の周遊マップやワークシート等、案内ツールの充実を図るとともに、多言語対応を含め多様なニーズに対応した情報提供を行う。
- ・旅行業者や地元観光団体とイベント等の情報を共有し、連携を図って観光活用を促進する。

2) 施設情報の提供

- ・主にインターネットを活用して、施設の案内、イベント情報、調査研究成果等を広く世界に向けて発信する。
- ・SNS等も活用して幅広い情報交換やファンづくりにつなげる。

3) 交流・観光催事の実施

- ・拠点施設もしくはサテライトにおいて、舞踊などの芸能披露、郷土食、ものづくり等が体験できるイベントを開催し、伝統文化の継承と幅広い集客につなげる。

4) サービス機能（軽飲食、ショップ）

- ・地元の事業者と連携し、ここでしか買えないオリジナルグッズを開発・販売する。
- ・カフェ・レストランと連携し、町民の日常的な利用や観光客の誘因を促す。
- ・竹富町の食文化や伝統製品の発信・継承の場としても位置付ける。

5) 観光回遊の促進

- ・「(4) 教育普及」で触れたとおり、町民をはじめ観光客にとっても魅力ある体験プログラムの提供を図る上で、屋外での自然体験や、史跡ツアー、観察ツアーなど、「体験型観光」※の潮流も踏まえて、地域回遊を促すプログラムを強化する。
- ・近年、観光回遊をサポートするスマートフォン用アプリケーションなどが開発されており、IT技術の活用による情報提供、回遊促進を図る。
- ・カフェ・レストランと連携し、町民の日常的な利用や観光客の誘因を促すとともに、竹富町の食文化の発信・継承の場としても位置付ける。

※ 訪日外国人に人気の体験型観光として、下記が挙げられている。

1位：マリオカート

2位：フクロウカフェ

3位：日本料理教室

4位 京都のまち英語ガイドツアー

5位：和服着付けと茶道体験

そのほか、サイクリングツアー、人力車ツアー、日本食ツアー、忍者体験、サムライ体験などがランキング上位に入っている。

（参考文献：『体験型観光コンテンツ市場の概観』観光庁観光資源課）

(6) 情報発信

①基本方針

ひとりにつながり、同時に地域、世界ともつながる情報発信を行う。遠隔地でも「いつでも」「誰でも」「どこからでも」つながる施設として、ITを活用したデジタルコンテンツ、SNS、アプリ等による情報提供を行い、本施設の認知度向上を図り来訪動機創出につなげる。

②事業の展開

1) デジタルコンテンツ（おうちミュージアム）の開発

- ・本施設の収蔵資料、情報を活用し、町民の生涯学習に資する学習コンテンツを開発する。
- ・「昔の玩具をおうちで作ろう」「昔のおやつを作ろう」といった子ども向けの体験コンテンツ、学校の授業向けのコンテンツ、大人を対象とした連続講座など、多様な知識レベルの人に向け、学びが楽しくなるコンテンツを開発し、提供する。
- ・研究活動や、展示・体験の紹介なども配信し、本施設の活動の姿をリアルタイムで伝え、本施設への興味を喚起する。
- ・「竹富町の浜辺で見られるいきもの」「竹富町の植物」「史跡を歩いてみた」など、様々なテーマで構成し、子どもや町民、研究者など協力・参画も図っていく。

2) 双方向コミュニケーションの創造

- ・本施設からのライブ配信、企画展等のイベント配信等も行い、視聴者がチャットでリアルタイムに参加するなど、デジタルツールの長所を活かした双方向コミュニケーションを図る。
- ・研究者の司会による Web ワークショップなどを開催し、視聴者がワークショップにより制作したレポート、工作などの作品をデジタル展覧会として発表するなど、双方向コミュニケーションの成果を情報として蓄積する。
- ・遠隔地から操作できるツールによる展示観覧も検討する。本施設に足を運べない人も展示やコミュニケーションが楽しめる工夫を行う。

3) ビッグデータの活用

- ・ビッグデータを活用して利用者の行動履歴を把握したり、本施設の滞在時間を分析するなど、観光促進に向けた対策を検討する。またウィズコロナの対策として周辺の観光施設とも連携し、利用者の安全に配慮し、施設の混雑状況について「来館可能」「30分待ち」などリアルタイム配信を行うことを検討する。

(7) 連携構築

①基本方針

本施設においては、文化振興・観光交流に向けて多様な事業活動が想定されることから、本施設単独ではなく、町民、地域団体、研究機関など連携し、事業推進体制を強化する。

P.41 に記載した通り、竹富町全体がいわばフィールドミュージアムであり、本施設はその拠点としても機能し、地域活性化に向けて官民を超えて多様な主体と連携することが望ましい。

②事業の展開

1) 町民、地域団体等との連携

- ・施設準備段階から、本施設の活動に町民や地域団体、竹富町ファンを巻き込み、協力体制づくりを行う。町民が参加することによる興味・関心の喚起、地域活性化ムーブメントの創出を図る。施設開館後も協力体制を維持し、地域とともに成長する施設をめざす。

2) 研究機関との連携

- ・豊かな自然と広大なフィールドを持つ竹富町は、研究者や研究機関の調査研究対象となっている。大学などの研究機関と連携した共同研究を行い、その成果を本施設に蓄積し、展示や情報発信を通じて紹介する。

3) 関連施設との連携

- ・世界自然遺産関連施設や姉妹町、友好都市と連携して各地を紹介する事業を行う。

4) 民間施設や事業者との連携

- ・本施設を長期的に維持していく上で、文化・観光振興を通じて経済的効果を発揮することは重要である。宿泊を伴う観光体験メニューの開発等、地域経済を潤すしくみづくりを検討し、宿泊施設や観光事業者等との連携を図る。
- ・近年の竹富町においては、観光の進展に伴う環境破壊が懸念されており、ネイチャーツアーガイド等に向けて適切なガイド指針等を啓蒙し、定期的に研修を実施するなど、事業者の人材育成を図り、フィールドミュージアムの資源を保全する。

第6章 展示構想

1. 展示の基本方針

博物館施設における展示は、その施設の顔であり、広く一般の人々がその施設を訪れる一番の理由となるものである。

本拠点整備の目的に掲げた「地域の自然・文化を町民が守り誇るための共通の知識を身につけ、開かれた交流拠点としてまちの未来につなげていく」の実現に向け、子供から外国人まで、あらゆる層の来館者が楽しめるものとして展示を計画する。

また、常に施設を新鮮なものとするため、新たな研究成果や自然環境に対する活動、観光情報等を更新する仕組みを持たせる。

竹富町には有形・無形の文化財が多数あるが、本構想の段階において町が収集している資料は、竹富町離島振興総合センターに展示されている剥製や民具等と、コンテナに保管されている土器類のみである。

展示の充実に向けて、施設構想と同時に各島々にある有形・無形の資料の調査も進め、集められるものから収集・整理・修理・保管を行う必要がある。

また、実物資料だけでなく民具の製作工程や祭祀や芸能等の活動や、昔の暮らしのインタビュー記録等については映像と音声で記録・保存することも必要であり、これらが展示の優良なコンテンツとなり、後世に残すべき資産につながる。

2. 展示コンセプト

**日本最南端の島嶼の町・竹富町が
織りなしてきた3万年の歴史を未来につなげる**

竹富町は有人・無人16の島を有する、我が国最南端に位置する島嶼の町で、海を渡ってきた人々がおおよそ3万年以上前から定住した。

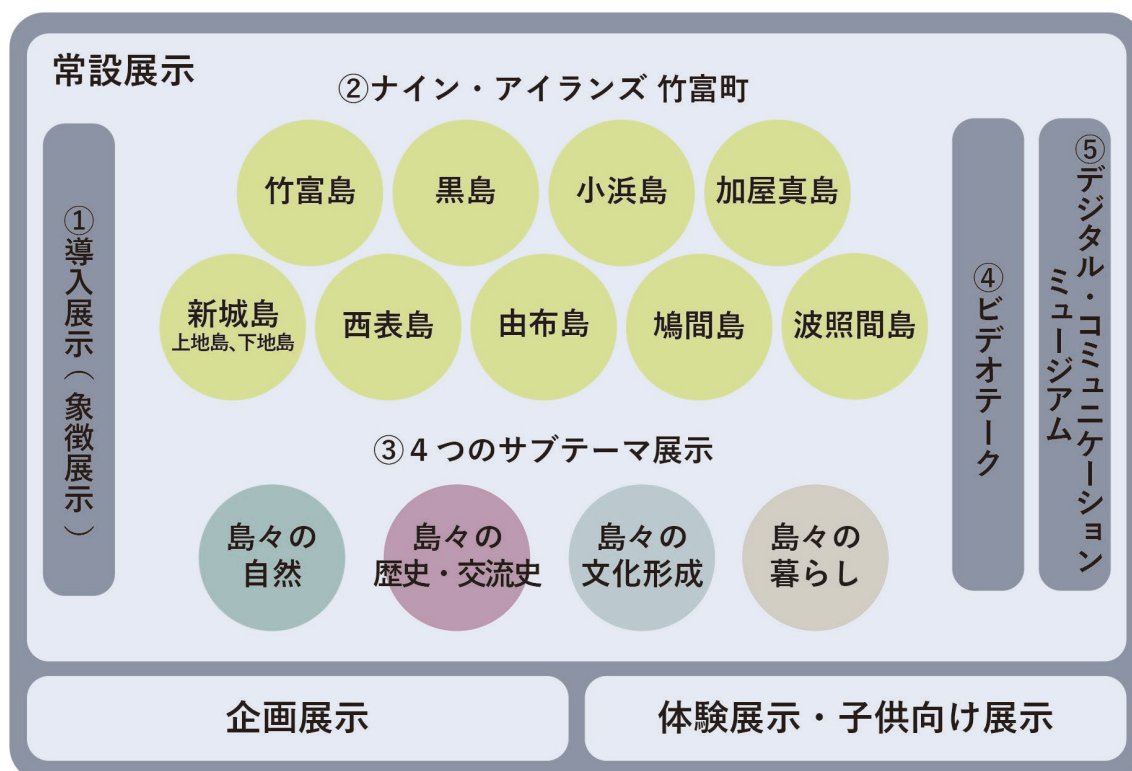
16の島々は、それぞれ特徴のある自然環境を有し、美しくかつ厳しい自然の中で、先人たちは知恵と工夫を重ね、島ごとに独自の文化を築き、代々守り、受け継ぎ、今日それらは人類共通の財産となっている。

本拠点の展示は、3万年あまりに及ぶ竹富町の歴史の流れと、集落への人々の定住、その中で生まれ、守られてきた信仰や祭事、生活の営みなど地域固有の文化とその背景を正しく理解して未来に継承し、新たなまちづくりにつなげることを目指すものとする。

3. 拠点施設における展示構成（コア展示）

拠点施設におけるコア展示は常設展示と企画展示、体験展示の大きく3つで構成する。

常設展示は展示コンセプト「日本最南端の島嶼の町・竹富町が織りなしてきた3万年の歴史を未来に継承する」を象徴する「①導入展示」、9つの有人島を紹介する「②ナイン・アイランズ竹富町」、そしてそれらを見るうえでのポイントを伝える、「③4つのサブテーマ展示」で構成される。また、ウェブとも連動した「④ビデオテーク」、各島々のサテライトとつなげる「⑤デジタル・コミュニケーションミュージアム」等のコーナーも設置し、リアルとデジタルの複合を施設内でも体験できるものとする。



【常設展示】

①導入展示（象徴展示）「私たちはどこから来たのか」

八重山をはじめとする琉球列島には、約3万年前に人々が台湾から海を渡ってきたと考えられている。その人々が去り、また新たな人々が海を渡ってくるのが繰り返され、その中で定住していった人々が苦労を重ね土地を切り開き、自然や動植物と共生しながら暮らしを発展させてきた。その営みは今日に至るまで続いている。

導入展示では、こうした竹富町の島々と海とのつながりを象徴的に見せるため、古代、船に乗って海を渡ってきた人々と当時の船の実物大再現を設置。そこから島々に定住していった人々、琉球王朝時代の人々、そして現代へと続く、人々の連なりを表現し

ていく。また、その時代時代に共生してきた動植物も同じく実物大で再現し、過去から現代に続く、人と自然、動植物の行進を展示で表現する。

②ナイン・アイランズ竹富町

竹富町の9つの有人各島をテーマに、島々に特有の自然環境や動植物、海洋生物の特徴、その環境から生まれた生活・文化、独自の言語や伝統芸能、固有の祭祀や信仰習俗など、島ごとの「歴史」「自然」「文化」「今」を伝える。

③4つのサブテーマ展示

各島々の展示（②ナイン・アイランズ ミュージアム）を見るうえでのポイントを4つのサブテーマで伝える展示。

「島々の歴史・交流史」

導入展示の解説版。竹富町の島々にいつ人が渡り、定住していったと考えられているのかから沖縄本島との関係、そして竹富町の誕生から今日までの流れを紹介する。

「島々の自然」

日本最南端に位置する竹富町の島々は亜熱帯海洋性気候に属し、周辺には暖流の黒潮が流れ、四季を通じて温暖な気候にある。また、島には高島（西表島や小浜島）と低島（左記以外の島）があり、それにより生息する動植物や農作物に違いが生まれ、こうした条件が多様な自然環境・動植物を育てていることを紹介する。

そして、これら自然が世界自然遺産への推薦や国の天然記念物や国立公園へ指定されている理由を伝え、環境保全、生物保護、持続可能なまちづくりへの啓蒙も行う。

「島々の文化形成」

竹富町の島々には日本の中でも極めて価値の高い、他に類をみない独自の文化がある。その一番の特徴は無形の文字を使わない記憶の伝承である。竹富町の島々に残る文化、特に祭祀や芸能は、この記憶の伝承のために行われているものであることを伝えながら島ごとに違う文化を、方言や芸能等を紹介する。

「島々の暮らし」

建築や道具など、黒潮文化圏の影響を受ける竹富町の島々の暮らしの概要を紹介する。島々に共通に見られる衣食住の特徴や産業等についても紹介する。

④ビデオテーク

各島々に伝わる祭礼や芸能、民具の材料となる植物の収集から製作工程等を映像や画像、音声で記録・保存し、それらを系統的に分類・整理し、公開するコーナー。Webとも連動させ、広く一般に公開していくものとする。

⑤デジタル・コミュニケーションミュージアム

各島々に設置されたサテライトとミュージアム（コア展示）をつなぎ、公開授業を行ったり、島々のライブ映像をミュージアム内で上映するなど、スタジオ的な機能を持つ空間。

【企画展示】

竹富町の島々の自然や文化に関する展示や、常設展示の情報を深掘りして紹介する展示など、多彩なテーマで展示を行う。展示は学芸員が企画するだけでなく、町民企画による展示や沖縄県内外の博物館の巡回展や企業、団体との共催による特別展示なども受け入れて開催する。また、スペースの有効活用として町のイベント等の貸し会場としての利用も可能とする。

【体験展示・子供向け展示】

楽しみながら学べる体験キットやワークシートを用意し、展示物に触る、着る、奏でる、探る、作るなどの体験ができる学習室。その他、アクティビィとして島々の伝統的な衣装や、かりゆしを着ての記念撮影、草玩具や民具を作るワークショップなども開催する。

4. 各島々でのサテライト展示のあり方

サテライト展示のあり方は数通り考えられるため、以下にその例を挙げる。

サテライトの設置場所は各島々の公民館、学校等と今後、調整を図り検討を進める。

①デジタル・コミュニケーションミュージアム

- ・ミュージアムと学校、学校と学校を光高速通信でつなげ、物理的な距離を超えて学ぶ、交流するサテライトミュージアム。学校教育とは違ったミュージアムならではの視点から、竹富町の子供たちが等しく町や島々の歴史・自然・文化を学ぶ機会を創出する。
- ・仮想現実の技術（VR、AR）等により、離れた空間を自然につなぐシステムの導入なども検討する。

②移動ミュージアム

- ・学校教室や公共の空きスペースに、ミュージアム発の組み立て式の展示ケースや解説キットを持ち込み、見慣れた場所を一瞬でミュージアムに変身させる移動型ミュージアムの展開も検討する。

③ Web ミュージアム

- ・各島々に伝わる祭礼や芸能、民具の材料となる植物の収集から製作工程等を映像や画像、音声で記録・保存し、それらを系統的に分類・整理し、公開するコーナー。常設展示④ビデオテークに連動。
- ・子どもや外国人等に向けた、よりライトに楽しめるコンテンツ。「昔の玩具をおうちで作ろう」「島々の方言をしゃべってみよう」等、多様な知識レベルの人に向け、学びが楽しくなるコンテンツを開発・提供する。

④公開型収蔵庫展示（見せる収蔵庫）

- ・島にある有形文化財の中には、島外に持ち出せないものもある。また、文化財保護、観光回遊促進の観点から、その島で資料を保存・展示することも望まれる。そこで、資料を収蔵・保管しながら公開する「公開型収蔵庫」の整備を検討する。
- ・収蔵されている資料は、資料の情報だけでなく、その使い方や製造工程の映像もアーカイブとして収集・公開する。

⑤テーマミュージアム・フィールドミュージアム

- ・竹富町のなかでもユニークな歴史的背景を持つ地域においては、既存施設やフィールドを活用した展示を行い、周遊観光の一助とすることも検討する。
- 例) 竹富島集落遺跡ミュージアム、黒島畜産ミュージアム、小浜島さとうきびミュージアム、新城島パナリ焼ミュージアム、西表島（西部）炭坑ミュージアム、鳩間島カツオ漁ミュージアム、波照間島燐鉱ミュージアム、等。

⑥ミュージアムフェリー

- ・各港や定期船船内において、ミュージアム発信による映像による情報提供を行う。
- ・各島々に渡る前に島内で守るべきルールやその背景を紹介し、竹富町の持つ豊かさやユニークさ、遺産を保護することの重要性を知ってもらうきっかけを作る。

5. 展示計画時の留意点

- ・展示計画はミュージアムの展示に必要となる分野の研究者、有識者等と協議・意見交換を行いながら内容を検討する。
- ・上記に加え、関係機関や地域の団体等と連携して計画を行い、他機関により竹富町や八重山諸島で行われている研究結果を収集し、竹富町の財産として役立てる。
- ・展示は、各島で行われている歴史・文化・自然を伝えるガイド、インタープリターの質向上に資するものとして、常に最新の情報に更新させるべきものとして計画する。
- ・市民参画による展示づくりの機会を提供する。

第7章 管理運営構想

1. 管理運営の仕組みに関する検討課題

新しく設立される文化振興・観光交流拠点は、第4章において、その基本理念を「百年後も竹富町らしく存続していくための「知」と「交流」の拠点」として設定し、理念の実現に向けた活動イメージを提示している。

新たな拠点施設の管理運営方法の検討においては、この施設で実現したい活動を長期的、継続的に実施していくために必要な人材の確保と安定した資金調達を可能にする仕組みとしての最適解を求めていくこととなる。

現段階では、先に掲げた本施設の活動イメージごとに具体的活動内容を想定し、当該活動を実施していくうえで必要となる仕組みや体制等を整理して、今後、事業化のスケジュールに応じて管理運営の仕組みを検討する際の課題を示すこととする。

基本理念の実現に向けた活動イメージ	具体的活動内容（想定）	活動の実施に必要なとなる仕組み・体制等（管理運営の仕組みに関する検討課題）
【文化振興】		
研究・収集活動 資料・情報の蓄積	・調査・研究、資料や情報の収集・整理・蓄積の継続的实施	・博物館機能の根幹となる研究機能の確保 ・公益性を確保するための行政の関与 ・外部の研究機関・大学組織等との連携
学習機会の提供 地域人材の参加、人材育成	・対象者に応じた学習プログラムの開発、提供	・学芸員や研究者と地域人材の交流機会の創出 ・住民ボランティアによる運営参加
最新の活動成果の発表 新たな文化資源等の発見・創造	・調査・研究成果の公表 ・町民参加による研究活動の実施	・住民の文化活動、サークル活動等との連携 ・住民主体の企画展・発表会等の開催支援
【観光交流】		
見どころ、回遊情報等 口コミ等による広報効果にぎわい・交流創出	・観光客への旅前・旅中・旅後の情報発信 ・観光客と地域住民との交流企画の実施	・デジタルネットワーク活用 ・利用者・住民参加型の情報発信、情報共有、情報交流システムの導入 ・観光客と地域住民との交流の場の創出
多彩な文化体験等 文化継承者の支援・育成	・文化体験プログラムの開発、提供	・担い手となる地域人材の育成 ・公民館活動との連携 ・地域芸能、文化を披露する場の創出
まちあるき観光、食、買い物 新たな観光ニーズの吸い上げ	・観光客への観光情報・サービス提供	・観光事業者との連携、情報共有の仕組み ・利用者のニーズ・満足度の把握・分析・活用の仕組みの導入

2. 運営体制構築に向けた必要条件の整理

新たな拠点施設には先に示した幅広い活動の実施と多様な機能が求められており、地域住民と観光客等の多様な利用者層を対象としている。そのため、当該施設を継続的・安定的に運営していくために必要な人員配置を想定したうえで、運営主体となる組織体制のあり方を検討していくこととなる。

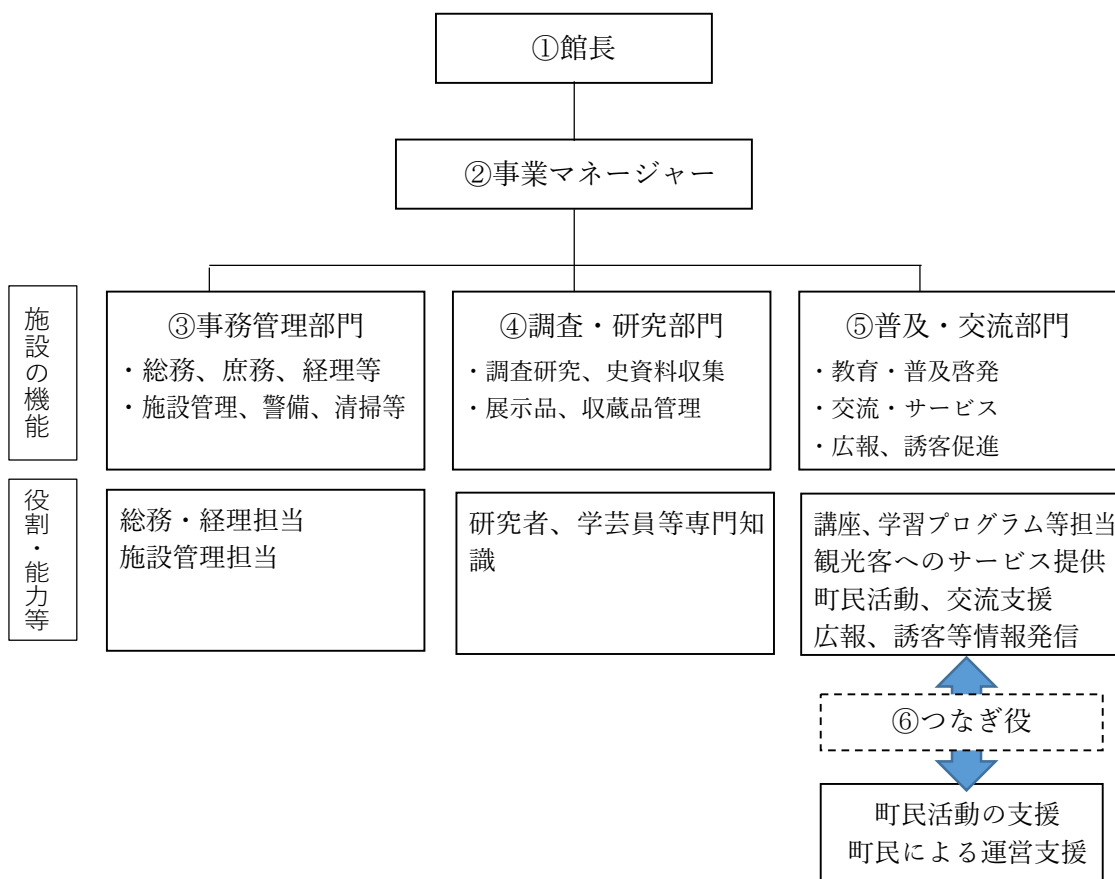
現段階では、第4章の5（P.49 参照）において提示した本拠点施設で想定される主な機能に対応して、想定される具体的業務内容や配置人員に求められる役割・能力等を整理することにより、今後、運営体制を構築していくうえでの必要条件を示すこととする。

施設の機能	具体的な業務内容と、配置人員に求められる役割・能力等 (運営体制構築に向けた必要条件)
エントランスホール	<ul style="list-style-type: none"> ・総合受付、施設案内 ・観光情報提供 ・料金徴収
展示機能	<ul style="list-style-type: none"> ・展示解説、案内、専門知識の発信 ・特別展示、企画展示の企画(年間プログラム)調整等
収蔵機能	<ul style="list-style-type: none"> ・収蔵品の保管、管理 ・展示品の入れ替え等 ・新規資料の受け入れ、他館からの資料借用等
調査・研究機能	<ul style="list-style-type: none"> ・調査・研究(発掘等) ・資料収集活動(実物、写真、映像等) ・資料データベースの作成、管理
教育普及機能	<ul style="list-style-type: none"> ・博物館講座等、体験学習プログラムの開発・開催 ・小中学校への出前講座、学校カリキュラムとの連携 ・資料・図書の閲覧スペース、学習室の管理 ・友の会等の管理運営
交流・サービス機能	<ul style="list-style-type: none"> ・設備管理(音響、照明、空調等) ・休憩・飲食スペースの管理 ・飲食の提供、物販等、衛生管理 ・文化体験プログラム等の提供 →参加者の募集(情報発信)、 準備・運営(地域協力者との調整等)、安全管理 ・広報 ・誘客促進活動
事務・管理機能	<ul style="list-style-type: none"> ・組織管理(館長、事務職員) ・総務・庶務、経理事務 ・施設管理(建物、外構等) ・施設警備、防災対策 ・施設清掃 ・管理者(町)との調整

前ページに挙げた業務内容、配置人員に求められる役割・能力等を踏まえ、運営組織の例を下記に示す。

世界からの観光客が訪れる施設として多言語対応は必要であり、具体的には、ホームページ作成、受付でのさまざまな対応、展示内容解説の作成、解説への質問対応、多言語の施設案内冊子の作成、外部研究機関との連携交流、ガイドツアー研修など多岐にわたるため、Iターン・Uターン住民も含めて外国語に堪能な人材グループの協力が不可欠と考えられる。

【運営組織の例】



①館長は本拠点施設の責任者として事業活動全般を掌握するとともに、国内外の学会への参加など、対外的な発表や交流活動の際の「顔」となる。

今後、館長の人選が必要であり、その選定基準（これまでの職歴、研究分野等）について検討が求められる。

②文化振興、観光交流を実現するために、いわゆるミュージアム部分と、観光ビジターセンター部分を統括し、業務内容や運営費のバランスを取りながら日々の業務を牽引する必要がある。そのため、事業マネージャー（副館長的な役割を果たす）の存在が重要である。

③事務管理部門は、総務、経理、施設管理等にあたる。

受付・案内、利用者からの問い合わせ対応、警備、清掃、保守などの業務を管理する。

- ④調査・研究部門は、博物館の根幹である調査・研究、収集・保存、展示等の活動を支える。本拠点施設においてどのような調査・研究分野を取り上げるかにより、最適な人選をする必要がある。
- 施設共用開始以前から研究者を人選し、調査研究、資料収集、常設および企画展示の計画など、オープン前から学芸的な活動を始める必要がある。
- 世界自然遺産に関しての国際交流に対応すべく、ICOM（国際博物館会議）の求める研究水準の学芸員資格のある研究職、専門職員の配置も検討する必要がある。
- ⑤普及・交流部門は、体験学習の提供、催し物の企画・実施、飲食・物販の管理、広報活動等にあたる。
- 近年の動向を踏まえたデジタルコンテンツの開発と発信、また学校団体や旅行社との折衝など、多言語による国内外からの誘客促進活動も求められる。
- ⑥拠点施設では地域との連携、地域からの支援が不可欠となることから、つなぎ役の役割も重要と考えられる。
- 町民活動の支援：地域活動の場、成果の発表の場として施設を活用してもらう
- 町民による運営支援：施設で実施する文化体験プログラム等の講師役になってもらう
- 等、これらを実現するためには、施設と地域をつないでくれる「つなぎ役」の存在は大切であり、具体的には各地域の社会教育委員、公民館長、地域活動団体のリーダー等を巻き込んで、地域との協働・連携の仕組みを構築することが望ましい。

3. 運営方式の考え方

現在の日本の公立博物館の運営方式は、地方自治体の直営方式と指定管理者制度の導入による方式という2つのパターンが中心となっている。また、指定管理者制度の導入範囲については、学芸部門を自治体職員が担うタイプ、学芸部門も指定管理者に委ねるタイプのどちらかに分類することができる。

地方自治体による直営方式は、効率性において指定管理者制度に劣る可能性がある一方で、自治体や住民の意向が反映され、継続的・安定的に事業が実施されるという利点がある。一方、指定管理者制度は、民間のノウハウを活かした効率的な事業展開が期待できるものの、指定管理者が交代する可能性があることから継続性の面が直営に劣ると考えられる。本施設の設置形態、運営形態によって2つのパターン（あるいはその複合）のどちらをとるべきか、または別の方式を検討するかについては、施設の目的・活動の検討をすすめたいうえで、最適な運営方式を選択していく。

4. 町民参画、連携の考え方

本施設を長期的、継続的に運営していくためには、町民の参画は必須である。そこで、本施設を町民による活動の場として気軽に利用してもらうことで、事業の企画や運営に参画できるよう、町民の登録制度の構築を検討していく。

その活動内容については、単に展示を見たり、体験学習に参加するだけでなく、竹富町の自然環境や史資料、文化活動を記録する調査や、町民自身が持つ技（例えば、民具の製作）の伝授等、多岐に渡るものが考えられる。本施設での活動が、未来の竹富町の歴史を記録することにつながるような、町民参画活動となることを目指す。

町民が事業の企画・運営等に積極的に参画できるよう、新しい施設への関心を高め、自ら参加したいという機運を高め、人材を育成する仕掛けが重要となる。供用開始までの期間を利用した、町民の積極的な参加を促す仕掛けとして、以下のような取り組みを検討する。

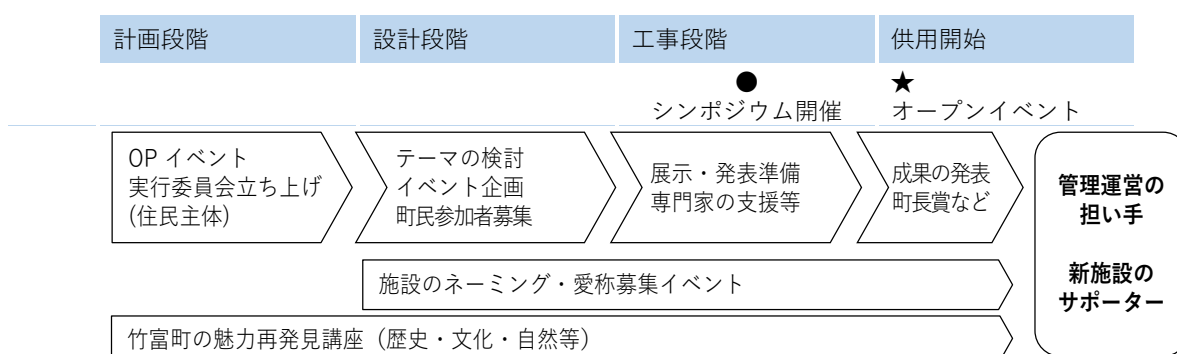
-1)管理運営に主体的に参加する人材の発掘・育成

また、これらの事業の企画や運営に主体的に参加する管理運営の担い手（あるいは協力者）の発掘・育成を目的として、計画・設計段階から町民参加で検討を進める場（町民向け講座、ワークショップの開催等）の導入を検討する。

-2)施設供用に向けた町民意識の盛り上げ

今後新たな施設の供用開始までには、計画・設計・施工と数年間を要する。供用開始までの期間を利用し、新しい施設に町民が関心を持ち、自分たちにとって身近な施設として活用したいという期待感を盛り上げることを目的とした各種イベント等の開催を企画する。

【新拠点施設供用までのイベント等の例】（イメージ）



5. 開館形態

本施設は博物館としての機能だけでなく、町民の日常的な利用から観光客への情報、体験の提供、交流の場など多くの機能が求められており、その利用形態は様々である。そのため、開館形態については、有料エリアと無料の開放エリアのゾーニングと合わせて検討する必要がある。

多くの町民や観光客がいつでも気軽に利用できるような、望ましい開館日時や利用料金を検討していく。

以下に検討にあたっての課題を整理する。

(1)開館日

収蔵資料や展示、施設の維持管理を適切に行う必要があることから、一定の休館日や、資料整理、展示更新などに伴う特別休館日を設けることが必要となる一方、観光情報や文化体験を求めて来館する観光客への配慮が必要となる。

(2)開館時間

管理運営の効率性とのバランスを考慮しつつ、多くの人が利用しやすい開館時間を設定する。観光シーズンや週末、企画展や各種イベント開催時等には開館時間を変更するなど、利用者の要望や集客を考慮しながら、柔軟に対応できるよう検討を進める。

また、子どもたちの自習や町民向けの講座やシンポジウム等の開催は夕方から夜間の開催が想定されることから、開館時間及び管理形態を検討する必要がある。

(3)利用料金（入館料）

子どもをはじめ町民が気軽に入館でき、また何度でも足を運んで継続的な活動の場として利用できるよう、利用しやすい料金設定が必要である。国内の他館の事例なども参照し、適切な利用料金（入館料等）のあり方について今後、検討を進めていく。

町民の積極的な活動の場としての利用を想定すると、すべてのエリアを有料とすることは現実的ではないことから、上述の通り、有料エリアと無料エリアのゾーニングの検討等と合わせて料金設定及び料金の徴収方法を検討する必要がある。

(4)周辺施設・類似施設の開館形態

施設名	所在地	開館時間	開館日数(休館日の設定)	利用料金
竹富島ゆがふ館 (西表石垣国立公園竹富島 ビジターセンター)	竹富島	8:00～17:00	台風時	入館無料
喜宝院蒐集館	竹富島	9:00～17:00	不定休	入場料：¥300
竹富民芸館	竹富島	9:00～17:00	年中無休 (種取祭期間中を除く)	入場無料
西表野生生物保護センタ ー	西表島	10:00～16:00 土日、祝日の開館日 は昼休み(12-13時) を一時閉館	毎週月曜日休館(月曜日が祝 日の場合翌火曜日も休館 祝日(こどもの日、文化の日除く) 6月23日(慰霊の日) 年末年始	入館無料
西表熱帯林育種技術園	西表島	展示ホール 9:00～17:00	土日祝祭日 12月29日～1月3日	展示ホール及び展示 林ともに料金は無料
竹富町資料室 (竹富町離島振興総合セ ンター内)	西表島	9:00～17:00	土・日・祝祭日	入館無料
黒島研究所	黒島	9:00～18:00 10月～3月は 17時まで	年中無休	入館料：500円
黒島ビジターセンター	黒島	9:30～16:30	月曜日休館 年末年始	入館料：無料
石垣市立八重山博物館	石垣市	9:00～17:00 入館は16:30まで	毎週月曜日 祝日 年末年始 燻蒸及び展示替えの日 (HPカレンダーで表示)	観覧料(常設展) 大人：200円 学生(中学生以 上)：100円 小学生以下無料 企画展：無料
八重山平和祈念館	石垣市	9:00～17:00	毎週月曜日 年末年始 臨時休館日(特別の事情によ り必要と認めた日)	観覧料 常設展 大人100円(70円) 子ども(小～大) 50円(35円) ※()内団体20人以上 ※観覧料免除規定あり
WWFサンゴ礁保護研究セ ンター(しらほサンゴ村)	石垣市	13:00～16:30	月・木曜日のみ	入館無料
沖縄県立博物館・美術館	那覇市	火～木、日 9:00～18:00 金・土 9:00～20:00	毎週月曜日(但し、月曜日が祝 日及び振替休日または慰霊の日 の場合は開館し、翌平日が休館) メンテナンス休館 ①2020.6.29～7.7 ②2021.3.1～3.4	観覧料金 別表参照

区分	一般	高大生	県外小中	
常設展料金				
・博物館常設展	530 円 (420 円)	270 円 (220 円)	150 円 (120 円)	
・美術館コレクション展	400 円 (320 円)	220 円 (180 円)	100 円 (80 円)	
特別展※	※企画内容によって料金は変わる。以下は例			
・博物館特別展	一般	大学生	高校生	中学生 以下
	1,100 円 (880 円)	800 円 (640 円)	500 円 (400 円)	無料
・美術館企画展	一般	高大生	小中生	
	1,100 円 (880 円)	500 円 (400 円)	200 円 (160 円)	

第8章 施設設備構想

ここでは、本施設を設置する候補地についての考え方を整理する。

1. 拠点施設およびサテライト施設の設置形態

有人9島が互いに離れた竹富町では、各島からの交通アクセスの良好な場所に拠点施設を配置し、拠点施設と連携したサテライトを各島に設置することが現実的である。(P.42の概念図を参照)

加屋真島は、現時点では管理人が常駐するのみで交通手段はチャーター便しかなく、電気・水道などのインフラも未整備であることから、現段階ではサテライト施設の設置は現実的ではない。

ただし、加屋真島は将来的に観光開発される可能性があり、開発の状況を踏まえてサテライト施設の設置も今後検討していく。

2. 候補地の検討

(1) 拠点施設の候補地の考え方

上記に述べた通り、拠点施設は町民・国内外観光客の集客および利用の促進に向けて、各島から交通アクセスの良好な場所に設置することが求められる。

拠点施設の候補地についての考え方を次に挙げるものとする。

- ・竹富町立の施設として、町内に立地
- ・船便の利用しやすさ
- ・土地取得費が不要もしくは廉価（町有地など）
- ・子どもの利用や、観光客の回遊に配慮し、港などのターミナルからの近さ（徒歩圏など）

上記の条件を満たし、多くの町民が利用しやすい候補地を検討する。

(2) サテライト施設の候補地の考え方

各島におけるサテライト施設をすべて新設することは、整備費や維持管理面において現実的ではないと考えられることから、既存の公共施設・観光施設などを活用したサテライト施設を検討する。

各地区の公民館、ビジターセンターや資料館など既存の展示施設にサテライト施設を併設し、既存施設と一体的に運営するなど、実現しやすい手法を検討する。

(3) 拠点施設の候補地の評価

候補地を評価する視点を下記に挙げる。

① 土地の利用しやすさ

- ・土地の有効利用を図る上で、敷地内の高低差が少なく、変形でない地形が望ましい。
- ・展示する資料の大きさ、収蔵する資料数などによって、天井の高さが必要となる場合もあることから、建物の高さ規制の有無などを十分に把握して候補地を選定する。

② 適切な敷地面積

- ・施設本体に加え、駐車場、園庭などの屋外空間も必要となる。施設周囲にゆとりを確保できる敷地面積であることが望ましい。

③ アクセスの良さ

- ・各島間の交通手段が船舶であることから、港ターミナルからのアクセスの良さが求められる。
- ・観光回遊の促進に向け、周辺の観光スポット、物販・飲食などに回遊しやすい立地が望ましい。

④ 災害等のリスク低減

- ・貴重な文化財を展示・収蔵する施設として、災害リスクの低い場所であることが望ましい。敷地の周辺に、土砂崩れなどの懸念のある急斜面がない、施設が水没するリスクが少ない、危険物を扱う施設が周辺にないなど、文化財が災害にあわない候補地を選定する。

これらの条件を十分に満たす候補地として、西表島大原地区の町有地が挙げられることから、大原地区における拠点整備を想定する。

3. 施設規模、必要諸室と面積

(1) 利用者数の考え方

①類似施設の利用状況からの目安

類似の機能や規模をもつ施設、県内施設等の利用状況から、本拠点施設の年間利用者数を年間約 55,000 人程度と類推する。

②旅行先での行動比率からの目安

日本旅行業協会が発行する『数字が語る旅行業 2019』では、旅先で博物館・美術館などを訪れる国内外観光客の比率を発表している。

それによると、国内観光客の 10.8%、訪日外国人観光客の 29.3%が博物館・美術館等を訪れている。

西表島を訪れる国内外観光客数の上限を 33 万人と想定し、この比率を乗じたところ、年間約 40,000 人程度の利用者が想定される。

上記①、②より本拠点施設の利用者を 約 40,000 人～55,000 人程度 と想定する。

(2) 施設規模の考え方

①想定利用者数からの面積類推

- ・類似の機能や規模をもつ施設、県内施設等の㎡あたりの年間利用者数を手がかりとし、その平均値を算出すると約 20 人/㎡となる。
- ・年間利用者を 40,000 人～55,000 人と仮定すると、施設面積は約 2,000～2,800 ㎡と想定される。

②必要と考えられる諸室からの面積類推

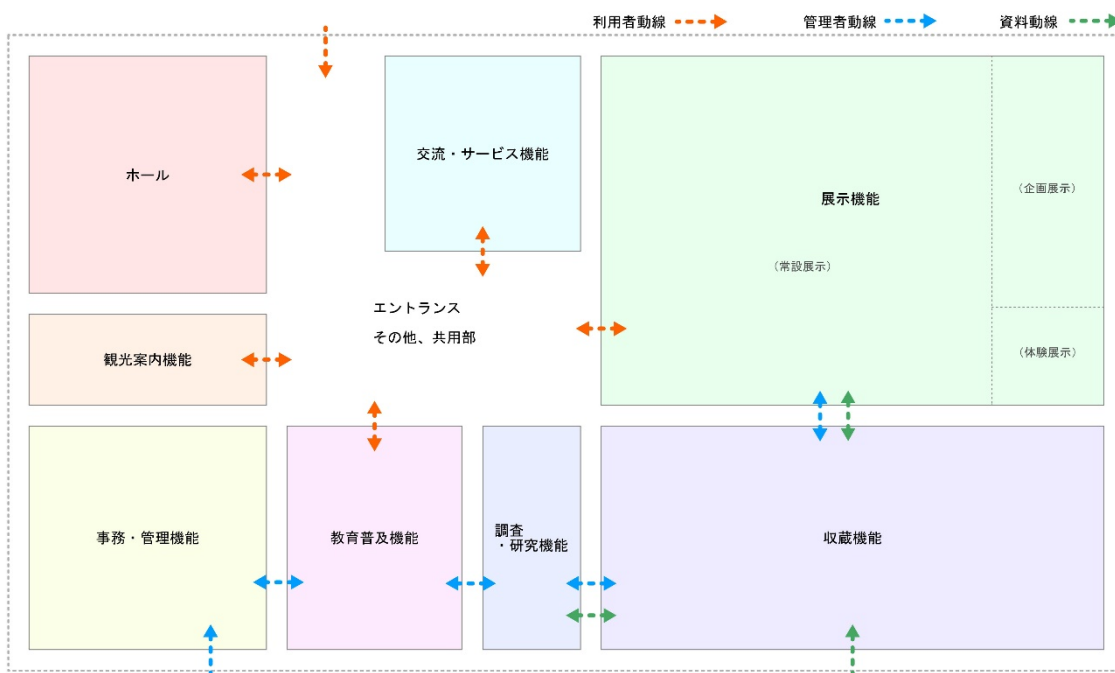
【文化振興・観光交流施設として想定される主な機能】

1 エントランスホール	待ち合わせ、団体の集合、総合受付などを有するロビー。
2 観光案内機能 70 ㎡	観光情報の提供、イベント情報、特産品紹介などを行う。 各島の見どころ紹介映像の上映、情報検索なども想定される。
3 展示機能 900 ㎡ (常設展示 700、 企画展示 150、 体験展示 50) ※子ども向け展示は 体験展示室に含む	常設展示室 : 資料や標本などを常設する展示空間。
	企画展示室 : 特別展示、企画展示を行う空間。 展示替えに対応する展示準備室も想定される。
	子ども向け展示室 : 未就学児など、低年齢の子どもと親が 利用する、遊びと学びの展示。
	体験展示室 : 触れる展示 (ハンズオン) に特化した展示。 例) 道具、楽器、着せ替え等
4 収蔵機能	一般収蔵庫 : 標準的な収蔵環境で保存可能な土器、石器など

600 m ²	を保管する。
	特別収蔵庫 : 重要文化財など、特に厳密な温湿度の管理が必要な資料を保管する。
	一時保管庫 : 展示替え資料や、借用資料などの一時保管室。
5 調査・研究機能 100 m ²	研究室 : 学芸員などの研究者の作業室
	研究に付随する機能として、資料庫(書庫)、写真室、実験室などが想定される。
6 教育普及機能 200 m ²	講座室、集会室、学習室 : 講座の開催や、自習に供する空間。
	図書室 : 図書閲覧に供する空間。
	学校団体向けの実験室なども想定される。
7 交流・サービス機能 600 m ²	多目的ホール : 発表会、シンポジウム等を開催する。
	休憩・飲食スペース : 休憩、軽飲に供する空間。
	ショップ : 観光ニーズを満たす土産、本施設のオリジナルグッズ、書籍などを販売する。
8 事務・管理機能 180 m ²	事務室 : 職員の事務スペース。
	館長室 : 施設責任者の部屋。
	打ち合わせ、応接室 : 会議用の部屋。
9 その他、共用部 900 m ²	更衣室、トイレ、給湯室、倉庫等。エントランスホール含む。 延べ床面積の30%程度、今回は約25%と想定。
合計 3,550 m ²	

上記①、②より本拠点施設の面積規模を2,000~3,550 m²の範囲と想定して検討を進める。

(3) 施設機能の構成 (イメージ図)



- ・一般の人々が利用する観光案内、展示、ホール、交流サービス、教育普及等の機能は、エントランスおよびロビー空間から直行できる動線を確保することが望ましい。
- ・施設の安全管理および資料保全の面から、管理者の動線、資料の動線は、一般の利用者の動線とは交差しないよう配慮する必要がある。
- ・資料の搬入・搬出口は収蔵庫近くに設置し、資料の移動距がなるべく短くなるよう配慮する。

第9章 今後の課題

1. 施設規模、建築条件、諸室構成

竹富町においては、新ビジターセンター設置、西表島への西表大原庁舎（仮称）設置、また国立自然史博物館誘致活動等、各種の施設計画があり、本施設の建築条件や諸室構成によってはこれらの施設との合築となる可能性もある。

公共施設の効率的な配置、運営の合理化などに配慮しながら、本施設に必要な諸室、面積規模について慎重に検討していくことが求められる。

2. 西表大原庁舎（仮称）内における機能の複合と棲み分け、適正面積の確保

候補地として挙げた大原地区の町有地には西表大原庁舎（仮称）が設置される予定であり、庁舎の他に防災拠点、世界自然遺産関連等の機能が複合した施設となる。

第8章において施設の延床面積を類推した（別紙資料2を参照）が、複合施設として設置する場合、適正な延べ床面積の確保や、複合施設の中での機能の棲み分けが課題となる。

3. 竹富町における文化財保存の重要性

竹富町は、2006年に世界文化遺産「黒潮にはぐくまれた亜熱帯海域の小島『竹富島・波照間島』の文化的景観」をユネスコの世界文化遺産登録に向けた暫定リストへの追加記載で提案書を提出した。文化庁は、全国の自治体から日本政府の暫定リストに盛り込むことを希望する物件について提案を受け付ける公募を実施し、沖縄県と竹富町は文化遺産「黒潮に育まれた亜熱帯海域の小島『竹富島・波照間島』の文化的景観」を提案したが、暫定リストには盛り込まれなかった経緯がある。

世界文化遺産登録の可能性は今後も残されており、自然遺産と文化遺産が複合した世界複合遺産※となることも期待される。

それも踏まえて、竹富町の貴重な景観や有形・無形の文化財を保護し、記録し、継承していくことが強く求められる。

※世界複合遺産は、文化遺産と自然遺産両方の登録基準を満たすもので、1,000件以上ある世界遺産の中で33件と非常に少なく、貴重な遺産である。

4. 開館までに必要な資料、予算、人員の確保

竹富町が現在所蔵している資料を展示するためには、資料の修復・修繕が発生することが想定され、また民具類などの資料製作、資料購入なども必要と考えられる。

資料製作に必要な素材（植物類など）の栽培、製作技術をもつ人材の確保、資料購入の予算の確保が求められる。

さらに、P.54の「(1)収集保存」で挙げたとおり、有形の資料のみならず、芸能をはじめとする竹富町の豊富な無形文化財、昔の暮らしの記憶などの映像や写真、歌や口承の音声等を撮影・記録することは重要であり、昔を知る人々の高齢化が進んでいることから、これらの撮影・記録をなるべく早く実行することが望ましい。

本施設における人員雇用も必要であり、館長候補者、学芸員候補者を絞り、雇用時期、雇用人数についての検討が必要となる。

5. 施設の運営計画の策定

竹富町にしかない新しい発想による拠点施設を目指し、施設のハード面を優先するのではなく、施設を支えるしくみづくり、地域を巻き込んだ運営プログラムなど、ソフト面での検討が重要となる。

本施設への協力や連携が可能な地域人材の確保、具体的な連携方法の検討等、今後の運営計画の策定が求められる。

6. 資金調達について

自治体が設備投資等を行なう際に、PPP/PFI※等で民間資金の活用が求められており、全国的にも活用事例が増えつつある。

PFIの導入によって、①国民に対して、安くて質の良い公共サービスが提供される
②公共サービスの提供における行政の関わり方が改善される ③民間の事業機会を新たに創り、経済の活性化に貢献する、という点が期待されている。

沖縄県内でもPFIによる公共事業がすでに行われており、本施設においてPFIの導入可能性について今後の調査・検討が必要と考えられる。

※公民が連携して公共サービスの提供を行うことをPPP（パブリック・プライベート・パートナーシップ：公民連携）と呼ぶ。

PFI（プライベート・ファイナンス・イニシアチブ）は、PPPの代表的な手法の一つで、民間の資金と経営能力・技術力（ノウハウ）を活用し、公共施設等の設計・建設・改修・更新や維持管理・運営を行う公共事業の手法。

7. 管理運営費の確保に向けて

現在、竹富島では平成26年に制定された地域自然資産法（所管：環境省・文化庁）に則り、令和元年8月に竹富町が策定した「竹富島地域自然資産計画」に基づいて、竹富島への訪問者に対して入域料（入島料）300円を任意で徴収している。

入域料は、竹富島の自然環境保全活動費（保全活動に必要な土地取得費を含む※）等に活用するしくみとなっている。

西表島においても入域料を徴収するしくみを実現すれば、本拠点施設の管理運営費の一部を入域料収入でまかなうことも考えられる。

多様な事業を展開することが想定される拠点施設の活動を支えるため、施設の条例を定めたり、運営協議会を設置する等、運営財源の適切な配分にも関われるような体制を整えていくことが望まれる。

※ナショナル・トラスト活動と呼ばれ、自然環境や歴史的建造物の破壊を防ぐために募金などにより土地を買い取ったり、寄付や遺贈を受けたり、契約を結ぶことによって、地域住民がその土地の所有者になり半永久的に保全するもの。

竹富島では、必要に応じて入域料の 1/3 以内をトラスト活動費に充当するしくみを作っている。

第10章 事業スケジュールの検討

一般的な整備工程を参考に、本施設の整備の流れを以下のように設定する。

基幹工程	ステップ1		ステップ2	ステップ3		ステップ4	ステップ5	
	基礎調査	基本構想	基本計画	基本設計	実施設計	建築工事／展示制作	開館準備	開館 ★
検討内容	<ul style="list-style-type: none"> 基礎的条件の整理 上位・関連計画の整理 地域特性調査 周辺施設状況調査 参考事例調査 利用者意向調査 等 	<ul style="list-style-type: none"> 基本構想の策定 基本理念 事業活動の方向性 施設構成・規模 管理運営方法、体制 概算事業費 事業スケジュール 等 	<ul style="list-style-type: none"> 基本計画の策定 展示計画 運営方針 事業活動計画 建設地の決定・確保 設計与件(建築、展示)の把握 展示資料の調査・収集の開始 <p style="text-align: center;">↑ 反映</p>	<ul style="list-style-type: none"> 基本設計図書の作成 空間構成計画、動線計画、基本図面の作成 展示コンテンツ具体化 概算予算書 建築・展示設計内容の調整 	<ul style="list-style-type: none"> 実施設計図書の作成 平面・立面・展開図 設備図、照明図、映像・情報システム図 展示実施シナリオ 設計予算書 建築・展示設計内容の調整 	<ul style="list-style-type: none"> 建築工事 設備工事 外構工事 施工管理 展示制作 工場制作 現場施工 	<ul style="list-style-type: none"> 事務・管理業務の準備 開館記念行事等準備 等 	<ul style="list-style-type: none"> オープニングイベント 開館特別展示 等
運営関連			<ul style="list-style-type: none"> 運営方針の検討 運営費の概算 等 	<ul style="list-style-type: none"> 運営基本計画 運営形態・手法、運営体制 町民参加、連携構築 運営人員の検討 運営費の概算 等 	<ul style="list-style-type: none"> 運営者の決定 	<ul style="list-style-type: none"> 管理運営マニュアル作成 		
展示関連			<ul style="list-style-type: none"> 展示資料調査(所在、内容等)、資料入手(購入、制作等) 				<ul style="list-style-type: none"> 展示制作 	<ul style="list-style-type: none"> 現場設置・試運転
建築関連			<ul style="list-style-type: none"> 建築基本計画 	<ul style="list-style-type: none"> 建築基本設計 	<ul style="list-style-type: none"> 建築実施設計 	<ul style="list-style-type: none"> 建築工事 		
施設の活動			<ul style="list-style-type: none"> 開館準備室の設置 	<ul style="list-style-type: none"> 開館準備室の人員拡充 事前広報活動 	<ul style="list-style-type: none"> 運営人員の雇用等 事前広報活動 	<ul style="list-style-type: none"> 事前広報活動 		<ul style="list-style-type: none"> 調査研究活動 収集保存活動 展示活動(企画展・展示更新) 普及活動 サービス活動 広報活動
西表大原庁舎(仮称)整備	<div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> 西表大原庁舎(仮称)および複合される機能の計画、設計スケジュールと足並みを揃えながら、本拠点整備を進める。 </div>		<ul style="list-style-type: none"> 建築基本計画 	<ul style="list-style-type: none"> 建築基本設計 	<ul style="list-style-type: none"> 建築実施設計 	<ul style="list-style-type: none"> 建築工事 		
防災拠点施設整備			<ul style="list-style-type: none"> 建築基本計画 	<ul style="list-style-type: none"> 建築基本設計 	<ul style="list-style-type: none"> 建築実施設計 	<ul style="list-style-type: none"> 建築工事 		
世界自然遺産関連施設整備			<ul style="list-style-type: none"> 建築基本計画 	<ul style="list-style-type: none"> 建築基本設計 	<ul style="list-style-type: none"> 建築実施設計 	<ul style="list-style-type: none"> 建築工事 		

基本構想策定委員会名簿（敬称略）

氏名	職 責
竹中 康進	環境省西表自然保護官事務所 自然保護官
金城 清	豊原公民館長
玉盛 雅治	大原公民館長
竹盛 洋一	大富公民館長
永露 芳子	古見公民館長
富本 健市	美原公民館長
島村 賢正	竹富町史編集委員
内盛 正聖	竹富公民館長
又吉 清真	黒島公民館長
花城 正美	小浜公民館長
比嘉 誠	細崎公民館長
仲底 克彦	波照間公民館長
西泊 宏信	新城公民館長
仲宗根 豊	鳩間公民館長
仲田 森和	竹富町教育委員会教育長
新城 賢良	竹富町政策調整監兼総務課長
新田 長男	竹富町議会議長
上勢頭 保	竹富町商工会長
西表晋作	竹富町観光協会長
石垣 金星	竹富町文化財保護審議委員会長
富里 保雄	竹富町民俗芸能保存会長
西野 康次郎	船浦公民館長
徳岡 大之	上原公民館長
池間 正幸	中野公民館長
國井 健二	住吉公民館長
前津 芳生	浦内公民館長
眞謝 隆一	干立公民館長
那良伊 孫一	祖納公民館長
屋良 誠一	白浜公民館長
池田 トシ子	船浮公民館長

特別アドバイザー

益田 兼房	国際イコモス・国際イコム文化防災委員
海部 陽介	東京大学総合研究博物館 教授
小池 明夫	プラディスコシステムワークス プロデューサー

基本構想策定委員会 検討経緯

第1回基本構想策定委員会

令和2年8月コロナ禍のため、書面にて開催

第2回基本構想策定委員会

令和2年10月6日 竹富町離島振興総合センター

令和2年10月7日 竹富町役場仮庁舎ホール

令和2年10月8日 中野わいわいホール

第3回基本構想策定委員会

令和2年11月25日 竹富町役場仮庁舎ホール

第4回基本構想策定委員会

令和3年3月1日 竹富町役場仮庁舎ホール

竹富町庁内幹事会 検討経緯

第1回幹事会

令和2年7月22日 竹富町教育委員会

第2回幹事会

令和2年10月9日 竹富町教育委員会

第3回幹事会

令和2年11月25日 竹富町教育委員会

第4回幹事会

令和3年2月17日 竹富町教育委員会